

間鋪候繪馬數多ク相成候ハ、見苦鋪繪馬之分、毎年極月ニ山上之繪馬納所江入置可申候正官五人、愛染寺右之六人月番を定、繪馬掛申節當番江相斷指圖を請、繪馬掛可申事、

附、鑑ハ月番之方ニ可預置事、

△山城志 六 紀伊郡

稻荷神社三座

今在、正殿、權殿、禮殿、舞殿各一字、小祠七前、神庫、樓門、華表二基、佛利四區、其文殊堂、見永享日錄、僧舍曰、愛染寺、

△二都巡見記 亨

稻荷山稻荷社

本殿五社相殿 若宮殿但權殿也 神樂所 御供所 神樂假屋 寶藏
命婦社 白狐社 繪馬納所 拜殿 樓門 繪馬掛所二ヶ所 手水屋形
二ヶ所 鳥居二ヶ所

諸堂之覺

辨財天堂 大黑天堂 弘法大師堂 文殊堂

○中社祝奏公杓日記

文政三辰年四月三十日、御役所(西町奉)へ差出、被留置候天明八年諸寺社一同差上置屋形書、修復次第書覺、切紙認物如左、

山城國紀伊郡

稻荷神社諸屋形繪圖繪樣書

一大鳥居 一下馬札 一御制札 一藤尾社社廻 一熊野社 一樓門達先
修覆之義奉願、修 一廻廊右同 一拜殿右同 一手水屋形二ヶ 一神樂
覆中ニ御座候、
所 一寶藏 一大黑天堂 一辨財天堂 一神供所同井戸 一御本殿化文
十四年丑十二月、繪皮屋根、葺替之儀奉願、翌寅十二月、御内陣其儘ニテ、外廻リ之儀奉願、當辰六月、御内陣廻リ、修覆之儀奉願、候處悉御許容被成下候ニ付、修覆中座ニ御座候、 一若宮殿右同 一長者社 一荷田社 一兩宮社 一弘法大師堂
一文殊堂 一上御殿御本殿 一白狐社右同 一繪馬納所 一繪馬掛所

一北之鳥居 文政二卯九月御願、修葺中ニ御座候、 一神馬屋 一參籠舎 一田中社 文政九年
月社廻リ井瑞籬中門鳥居トモ、修葺御願申上、修葺中ニ御座候、 一御旅所 一古御旅所
 右之通御座候以上、

辰四月

稻荷社

△花洛名勝圖會 東山

稻荷神社

若宮 本社の右傍の後に 神輿殿 若宮の左 辨財天社 本社の左傍 御
 供殿 辨財天社の 寶庫 二ヶ所、御供殿 大黒堂 本社の左 神樂殿 大黒
 并 拜殿 本社の正面石 愛染堂 境内の北 愛染寺 愛染堂の西に 聖
 天堂 愛染堂の傍にあり 大師堂 上の御殿の前 文殊堂 上の御殿の前 繪馬舎 愛
 堂の向ふ 樓門 西向、左 大鳥居 西向、正面伏見街道に臨む、 北鳥居 愛
 上に同、神幸 道にあり

○御殿預荷田信義日記

慶應四年四月五日、太政官御達ニ付神祇事務局より御觸左之通、

一中古以來某權現、或ハ牛頭天王之類、其外佛像を以神號ニ相稱し候神社不

少候、何れも其神社之由緒委細ニ書付、早々可申出候事、

但勅裁之神社、御宸翰、勅額有之向ハ、是又可相伺、其上ニ而御沙汰可有之

候、其餘之社ハ、裁判所、鎮臺、領主、支配頭等へ可申出候事、

一佛像を以神體に致し候神社ハ、以來相改可申事、

附本地杯と相唱、佛像を社前ニ掛、鰐口、梵鐘、佛具等之類差置候分ハ、早々

可取除事、

右之通被仰出候ニ付、諸神社之向ハ、當局ハ布告ニ可相成筈ニ候得共、先達執
 奏被免候後、觸達等未御取極無之事故、先各鎮臺、裁判所、領主、支配頭より可相
 達事、

三月

神祇事務局

同月六日

一昨日被仰出ニ付、今日より中門内大黒堂始、其外追々撤却ニ掛リ候、
一何れ愛染寺も廢止候得共、差掛リ諸堂向佛體、愛染寺へ取込置諸堂屋形納
候丈、愛染寺門内へ爲入候事ニ治定、
一社務ノ廻文左之通

此度被仰出之趣、尙亦于後追々御觸有之候而、御承知と存候、依之當社連神
前ニ先年より有來候、諸堂佛像とも今度取拂、并愛染寺殿上四間相殘其餘
悉取拂、勿論住寺者退院申渡候間、爲心得申入候、

右ニ付、境内西光寺、淨安寺も同様、是又申渡候、

五月廿七日、太政官へ左之通差出、

辨天堂

大黒堂

文珠堂

大師堂

島辨天堂

右社邊ニ有來

愛染堂

聖天堂

右愛染寺中有來

右之諸堂悉取拂申候、此段御届奉申上候以上、

慶應四年五月

稻荷社司中

○官省伺指令留

明治七年九月廿四日、教部省へ靈魂社建築願出、

願書

當社教會講社施設候ニ付而者、氏子、又ハ信徒者之亡魂祭祀致度、依テ本社
現境内へ靈魂社建築仕度候ニ付、御許可被下度、此件奉願候也、

明治七年九月廿四日

少宮司野間正綱

教部大輔穴戸磯殿

指令

願之趣聞届候條地方廳へ可届出事

○官幣大社稻荷神社明細圖書附録

本殿五軒社造 前拜面唐破風造
但檜造丹塗 但檨白木造

此建坪五十六坪一分八厘

桁行、柱外面ニテ六間三尺
 梁間同 五間二尺二寸
 軒桁上ハヨリ椽束石口マテ、一丈九尺二寸
 内々陣、桁行六間三尺、梁間二間二尺
 内陣、桁行六間三尺、梁間一間一尺、内々陣、内陣トモ格天井
 大床、桁行六間三尺、梁間一間五尺二寸
 椽、四方長延二十二間四尺二寸、巾四尺五寸、高六尺
 高欄、四方長延二十六間三尺六寸、高一尺七寸六分
 但昇リ高欄付
 丸柱、徑一尺一寸五分
 軒出柱、眞ヨリ茅負外面マテ、七尺七寸六分
 前拜、正面柱外面ニテ四間、妻、同二間一尺、丸桁、外角ヨリ石口マテ、一丈五尺七寸、角柱、一尺二寸、軒出柱、眞ヨリ茅負外面マテ、六尺二寸、天井、屋根裏

玉垣、但檜白木造、四方長延三十二間、高五尺九寸、柱二寸八分角、
 屋根、檜皮葺、總坪三百八坪二分二厘

權殿若宮殿トモ稱ス
五軒社造、但檜造丹塗

此建坪二十三坪九分五厘

桁行、柱外面ニテ五間、梁間、同三間八分
 軒桁、上ハヨリ椽束石口マテ、一丈四尺九寸
 内々陣、桁行五間、梁間一間三尺六寸
 内軒、桁行五間、梁間四尺八寸
 大床、桁行五間、梁間一間二尺三寸五分
 内々陣、内陣トモ格天井
 椽、四方長延十六間二尺八寸、巾二尺八寸、板上ハヨリ石口マテ四尺八寸
 高欄、四方長延十八間三尺、高一尺四寸四分
 但昇リ高欄付
 丸柱、徑七寸
 角柱、五寸六分
 軒出柱、眞ヨリ茅負外面マテ、四尺五寸
 屋根、檜皮葺、九十五坪七分二厘

建築年度修營本社ニ同シ

能樂殿

此建坪五十三坪五分

正面、柱外面ニテ三間一尺六寸
 妻同 四間三尺八寸
 丸桁、上ハヨリ石口マデ一丈五尺一寸五分
 床、上ハヨリ石口マデ二尺八寸
 脇座、市三尺
 高欄、長延三間四尺六寸、高一尺七寸
 二軒出柱、真ヨリ茅負外面マデ六尺六寸五分
 天井、屋根裏
 角柱、八寸

橋掛リ

桁行五間、梁間一間一尺
 軒桁、上ハヨリ石口マデ一丈一尺四寸五分
 軒出柱、真ヨリ茅負外面マデ二尺七寸五分

鏡ノ間

正面柱真々一間三尺六寸六分
 奥行、同 二間五尺
 軒桁、上ハヨリ石口マデ一丈三尺四寸五分
 軒出柱、真ヨリ茅負外面マデ二尺九寸
 柱、五寸四分角

樂屋

表、桁行二間五寸、奥行四間二尺一寸
 裏、桁行柱真々三間四尺一寸五分
 軒桁、上ハヨリ石口マデ一丈

傳イ

桁行長延九間三尺
 梁間四尺

使所

桁行一間
 梁間三尺

小家板間

桁行二間一尺
 梁間一間三尺一寸

同 土間

桁行二間六寸五分
 梁間一間三尺五分

屋根
 檜皮葺、百十二坪八分
 柿葺、二十九坪九分
 棟瓦、長延十七間三尺六寸

明治十五年三月、願濟寄附建築

神饌所

此建坪三十一坪七分二厘

桁行八間四尺五寸、梁間二間一尺五寸
 軒桁上ハヨリ石口マデ一丈二尺
 後庇、桁行六間三尺七寸、梁間一間三尺
 柱、四寸角
 天井、竿縁
 軒出柱、真ヨリ茅負外面マデ三尺五寸五分
 椽、巾二尺五寸、長サ二間一尺四寸
 屋根、瓦葺四十二坪四分棟瓦長延十六間
但降り棟トモ

床柿葺九坪四分

建築年度不詳

神供水舎

此建坪一坪四分

桁行七尺一寸八分、梁間七尺一寸
 棟桁上ハヨリ石口マデ八尺五寸四分
 垣、高サ四尺九寸、柱二寸四分角
 本柱、六寸四分角

屋根、檜皮葺七坪三分
箱棟、銅板張

建築年度不詳

神輿庫

此建坪二十六坪一分

桁行八間一尺、梁間三間一尺二寸
 軒桁上ハヨリ石口マデ一丈六尺
 表庇、桁行八間一尺、梁間三尺
 裏庇、桁行九間四尺、梁間三尺
 表軒桁上ハヨリ石口マデ一丈二尺
 裏軒桁上ハヨリ石口マデ一丈七寸
 屋根、瓦葺五十三坪二分
 棟、長延十五間三尺六寸、但角柱トモ

建築年度不詳、維新前修營本社ニ同シ、維新後社費、明治十四年五月、伺濟寄附改造

祭器庫

此建坪二十坪九分七厘

桁行五間四尺、梁間三間二尺三寸
 軒桁上ハヨリ石口マデ一丈二尺八寸

前庇、桁行二間一尺五寸、梁間四尺八寸
軒桁、上ハヨリ石口マテ九尺二寸
屋根、瓦葺三十一坪四分
棟、五間八分

建築年度不詳明治三十七年九月、從前ノ
寶庫ヲ改稱シテ之ニ充ツ
社務所檜白木造

此建坪三十一坪五分（明細間數略ス、以下之
ヲ載セザルモノ皆同）

明治十四年六月、寄附建築

集會所檜白木造

此建坪百二十五坪七分二厘

明治十四年六月、寄附建築

遙拜所檜白木造

此建坪二坪七分六厘

明治七年二月建設

社務分局檜造丹塗

此建坪十五坪九分四厘

建築年度不詳

拜殿檜造丹塗

此建坪四十六坪五分

桁行、柱外面ニテ七間七寸、梁間、同四間七寸
丸桁、外角ヨリ石口マテ降一丈八尺二寸
函棟、上ハヨリ石口マテ降三丈六尺九寸
椽、四方長延二十五間三尺六寸
同出、三尺九寸
同四方高欄、長延二十七間五尺、高サ一尺九寸
同板、上ハヨリ石口マテ三尺四寸
二、軒出柱、真ヨリ茅負外面マテ六尺
柱、七寸角
玉垣、四方長延三十一間三尺五寸、高サ三尺六寸
屋根、檜皮葺百六十九坪八分

建築年度修營本社ニ同シ（按ニ、天保十年九月、特ニ修
營、且、建増アリ、前ニ出ツ）

樓門 檜松樺造丹塗

此建坪十五坪六分三厘

桁行、柱外面ニテ五間二尺五寸、梁間同二間五尺五寸
九桁、上ハヨリ石口降二丈七尺八寸
函棟、上ハヨリ石口降四丈八尺三寸
檼、上ハヨリ石口迄一丈七尺九寸
椽出、柱外ニテ四尺、同四方長延十九間二尺
高欄、四方長延二十二間、高サ二尺四寸
二、軒出組柱、眞ヨリ茅負外面マテ十二尺
屋根、檜皮葺百六十二坪

建築年度修營本社ニ同シ

廻廊南北共、但檜造丹塗

此建坪十七坪四分、但南北共

桁行、柱外面ニテ五間三尺、梁間同一間三尺五寸

軒桁、上ハヨリ石口マテ一丈

軒出柱、眞ヨリ茅負外面マテ三尺五寸

屋根、檜皮葺六十七坪七分、但南北共、

建築年度修營本社ニ同シ

繪馬舎檜造丹塗

此建坪十九坪一分

桁行、柱外面ニテ六間七寸二分、梁間同三間七寸二分
軒桁、上ハヨリ石口マテ、降一丈二尺八寸

屋根棟瓦上ヨリ石口マテ、二丈四尺六寸、
軒出柱、眞ヨリ茅負外面マテ五尺二寸、
天井屋根裏、
柱、太サ七寸二分角、
屋根、瓦本葺五十六坪一分、

建築年度不詳（按ニ、元祿七年、本社修理ノ時、
新ニ造營ノコト、前ニ出ツ、）

手水舎繪馬舎脇、但檜白木造、

此建坪、一坪二分

明治十年六月、寄附再建

神供水圍中門下南

建築年度不詳

北手水舎檜造丹塗

此建坪、二坪三分

建築年度不詳

南手水舎檜造丹塗

此建坪二坪三分

建築年度不詳

靈魂社 檜白木春日造

此建坪八分三厘

奥供物所 檜造丹塗(按ニ該所ハ命婦谷ノ奥ニ在ルヲ以テ、世人之ヲ命婦社ト唱ヘ、又奥院トモ稱セリ)

此建坪一坪六分五厘

桁行、柱外面ニテ一間三尺三寸三分、梁間同一間三寸五分

丸桁、上ハヨリ石口マデ七尺六寸五分、

柱、三寸八分角、

玉垣、四方長延六間、高サ四尺、

屋根、檜皮葺十四坪四分、

建築年度不詳

奥宮三軒社造、但檜造丹塗

此建坪十五坪四分

桁行、柱外面ニテ三間五尺二寸四分、梁間、同三間、

軒桁、上ハヨリ石口マデ一丈二尺三寸、

前柱、軒桁上ハヨリ石口マデ、一丈六寸、

椽、四方長延十三間二尺、同板、上ハヨリ石口マデ四尺三寸、同出、二尺四寸、

高欄、長延十三間、高サ一尺三寸、

丸柱、徑七寸、

軒出柱、眞ヨリ茅負外面マデ五尺二寸、

角柱、五寸二分、

屋根、檜皮葺八十七坪八分、

建築年度修營本社ニ同シ

文庫

此建坪六坪七分

建築年度不詳

神馬舎 檜白木造

此建坪一坪四分

桁行、柱外面ニテ一間四尺一寸、梁間、同五尺一寸五分、

軒桁、上ハヨリ石口マデ八尺、

柱、四寸角、

屋根、瓦葺四坪三分八厘、

文久二年五月、寄附建築

新供物所檢造丹塗

此建坪七分一厘

正面、外ニテ一間一寸六分、
妻、同四尺一寸六分、
軒桁、上ハヨリ石口マテ六尺七寸、
柱、三寸六分角、
内玉垣、四方長延二間三尺二寸、高サ三尺、
外玉垣、四方長延九間二尺八寸、高サ四尺五寸、
屋根、瓦葺四坪六分、
鳥居、柱真々九尺、高サ一丈二尺九寸、

建築年度不詳

神札授與所

此建坪四坪四分五厘

桁行二間四尺二寸、
梁間一間三尺九寸、

明治三十一年三月新築

寶庫

此建坪七坪五分六厘

桁行三間一寸五分、
梁間二間三尺、

明治三十六年九月新築

○社務所日誌

明治三十八年十月、樓門、廻廊、及拜殿修繕塗替落成

位
置

旅 所

○山槐記

仁安二年四月廿三日庚寅今夜爲御方違行幸鳥羽殿先幸八條堀川顯長卿家而彼近邊有稻荷旅所仍有此儀

○百練抄八

治承二年三月廿四日子刻炎上入道俊盛卿修理太夫信隆左京太夫修範三位中將知盛卿第家并故家保卿七條東洞院堂家成卿家號相稻荷旅所等燒亡
嘉祿二年二月十三日午時稻荷上中兩社旅所八條坊燒亡是神所大行事則正被改易之間則正愁望之餘參籠下殿燒死云云御體同燒失云云

○旅所由緒書

稻荷大明神御旅所由緒書

一稻荷大明神御旅所者弘法大師御在世之時弘仁十四年四月十三日日域江出現之節梅小路猪熊神宿候處らい地無之付七條油小路御旅所壹箇所

被立置數百年來神事祭禮勸來候處ニ、九十年以前、油小路御旅所、出屋敷ニ罷成候へば、替地ニ當御旅所信濃小路ニ御下行ニ付、今至、別條無御座候事、一梅、小路古御旅所之儀、日域出現之地(四字蟲喰)垂跡之地御座候へば、于今其通ニ立置、尤信濃小路當御旅所、何方江替り候へば、毎年之神事祭禮ニ、御神差、御留主神之祇式相勤申ニ付、于今社鳥居御座候、其上御旅所之諸社修覆等之節ハ、五社之大明神之奉移申御事、

一、毎年神事祭禮ハ、三月之午ニ御出、四月卯之日、還御被成候、則毎年御繪旨被爲下、頂戴仕候、從往古于今神事勤來り申候御事、

右之通由緒書仕指上、御斷申上候以上、

延寶六年

稻荷御旅所神主

午二月七日

田中久太郎

生嶋 右京

御檢地

御奉行様

覺

一五十一間半

稻荷社御旅所宮地

一三十六間

同 西御旅所下社宮地

一三十九間

右者、先規方御赦免地、往古より神秘御座候、而于今執行神事相勤申社地ニ而

御座候以上、

延寶六年

稻荷御旅所神主

二月

田中久太郎

生嶋 右京

伴九郎左衛門様

△山城國葛野郡西九條村檢地帳

延寶七年

石川主殿頭内

檢地總奉行

石川 伊織

檢地本々

伴九郎左衛門

同

加藤善太夫

山城國葛野郡西九條村檢地帳

除地之分

一五反八畝拾步三十五間

稻荷旅所境内

是者從往古除地依無紛除之

一貳反五畝貳拾五步三十五間

稻荷古旅所境内

是者從往古除地依無紛除之

△雍州府志三神社門

稻荷神社

齋場所 稻荷御旅所、在油小路七條、南弘法大師營、東寺時、八幡爲土地神、而

後稻荷神現出、暫寓芝守長者家、歷年月移、稻荷山、今旅所、則芝守之宅地也、祭

祀時、神輿在茲、二十日、斯遺風也、見于東寺緣起、(又見于京羽二重織留大全、西遊行囊抄、扶桑京華志)

△菟藝泥赴

稻荷御旅所 猪熊、東油、小路、西九條、北三月末の午日、いなりのおいてとて、

稻荷神輿五基、お山を出給ひて、四月上の卯日、まで、此所におはします、(又見

漢三才圖會)

△山城名勝志五洛陽

稻荷上中兩社旅所

今八條坊門猪熊、在小祠、俗號稻荷古御旅所、

拾芥抄京程圖、稻荷社、在梅小路大宮東、

今按、是古下社、御旅所乎、今旅所五座一所、在針小路、南油小路、西九條坊門、

北

△山城志 六 紀伊郡

稻荷神社三座

其神幸之地在京師油小路西九條坊門北(又見于京羽)

△稻荷神社考

中世より毎年四月上卯日を祭日と定められたるは、何時より始れるにや考難し、○中此日、山上の社より三座の神輿を旅所上中古には、八條坊門猪熊にのは、梅小路大宮東に在しなるべしと云へり、今世の旅所、は、五社一所にて、針小路南油小路西九條坊門の北にあり、に渡し奉るなり、

△稻荷谷響記

古旅所

二階社 見舊記、今古旅所ト云フハ、八條坊門猪熊ニ在小祠也、

右ハ下中兩社ノ旅所ノ古跡也、

政所或云、政所元在八條坊門猪熊邊、今按九條之御旅所上社是也、

拾芥抄云、京程圖ニ稻荷社、在梅小路大宮東云々、或説ニ是古下社、御旅所

乎ト、此説非也、

△諸國中行事大成 三月

中午稻荷祭御出

九條の御旅所に至る、○中此地は古しへ芝守長者が宅地なりとぞ、

△國花萬葉記 一ノ下

稻荷御旅所 油小路七條の南芝守長者跡、

○御殿預荷田信友日記(實永七年二月)

抑當社御旅所之事、於一社、茂家記雖及吟味、其舊記、目代家ニ少々相殘計ニテ、其餘者不分明、尤於旅所之儀式等、本山之非執行、其記不相殘、事不便ト云々、然而中古サシ田善右衛門、生嶋伊豆、田中久太夫等、三人之役人タリシカドモ、サシ田家、今以及退轉畢、尤下之宮者伊豆已來造立之社也、上古者西九條宇賀ノズント云所ニ御旅所有之處、豐臣秀吉爲將軍之時、往還之道之邊ナル故、不淨之汚穢、不時之恐ヲ以テ、今之御旅所へ被相移之由也、彼古御旅所者、元來嶋守

長者ト申者之舊地タリシトテ、今尙少之小社ヲ祭タルノ旨也、

○資益王記

文明十四年閏七月廿日、稻荷二階社御旅所顛倒、昨夜風故云云、中上兩社神主來申、

○社務所日誌

明治六年八月八日、古御旅所地面葛野郡第二區、西九條村、古御旅所一ヶ地、上知、祭神二社、現御旅所へ遷宮之事、

○官幣大社稻荷神社明細圖書

境外末社命婦社舊來御旅所

一京都府山城國葛野郡西九條村字鳥居口鎮座、

一由緒不詳、往古ヨリ此社地ヲ以テ御旅所トシ、毎年四月第二ノ午日、神輿渡御、五月第一ノ卯日迄滯輿、同日還幸、

一創立年月不詳、

祠宇及建造物

一境内坪數一千七百五十五坪、官有地第一種

上命婦社 檜白木造

此建坪、二坪三分五厘、

下命婦社 檜白木造

此建坪、二坪三分五厘、

北御旅殿 檜造丹塗

此建坪、一坪八分七厘、

明治十五年五月、寄附改造

南御旅殿 檜造丹塗

此建坪、一坪三分八厘、

太神宮 檜白木造

此建坪、一坪七分六厘、

北神樂所 檜白木造

此建坪二十坪九分
廊下

此建坪十二坪八分三厘
神饌所

此建坪十八坪
三社神輿舍 檜白木造

此建坪十八坪四分
田中社神輿舍 檜白木造

此建坪十坪
上社神輿舍 檜白木造

此建坪十一坪三分
詰所

此建坪四十七坪六分

南神樂所 檜白木造

此建坪二十一坪

○社務所日誌

明治三十七年四月、周圍石柵寄附建設、
三十八年五月、北鳥居外石柵寄附建設、

○實躬卿記

永仁二年四月九日己丑、天晴略○中抑今日、稻荷旅所へ在家人等會合行、臨時祭、
云云、其儀、以諸珍寶風流(四字不明)十二月作之、自正月、至十二月、或其月、詩歌、或
其月日所行、事共也、無別、子細珍寶多々、聊見物太荒遊也、雖不可然、徒然之餘也、
且家衆御見物云云、

○御殿預荷田信義日記

文久三年四月十一日、今日、石清水行幸(孝明天皇)ニ付、御旅所ニテ御小休、巳、半刻入
御、此以前御初穂供進、御拜被爲相濟、暫時御休息、午刻御出立、

神階

○類聚國史帝王三十四

淳和天皇天長四年丁未正月辛巳詔曰天皇詔旨止稻荷神前爾申給止閑申久頃
 間御體不愈大坐爾須依臣占求爾留稻荷神社乃樹伐爾禮罪崇爾出止太利申爾須然毛此
 樹波先朝乃御願寺乃塔木爾用我牟爲爾止東寺乃所伐爾奈今成崇利申我故爾畏
 天奈內舍人從七位下大中臣雄夏乎差使天禮代爾從五位下乃冠授奉理治奉
 留實爾神乃御心爾志坐波御病不過時日除愈給倍縱比神乃御心波爾不在止威神
 乃護助給牟力爾依天御躬波安利平支給牟所念食止奉憑波申給布天皇詔旨
 乎申給波久申

○續日本後紀十三

承和十年(仁明天皇)十二月戊午奉授從五位下稻荷神從五位上

○續日本後紀十四

承和十一年十二月丁亥奉授從五位上稻荷神從四位下

○文德實錄二

嘉祥三年十月辛亥進山城國稻荷神階授從四位上

○文德實錄九

○天安元年四月乙酉在山城國從四位上稻荷神三前各授正四位下

○三代實錄二

貞觀元年(清和)正月廿七日甲申奉授正四位下稻荷神三前並正四位上

○三代實錄二十五

貞觀十六年閏四月七日乙丑山城國正四位上稻荷上中下三名神並奉授從三位告文曰天皇我詔旨止稻荷神乃廣前爾申賜止申久京都爾近之公私爾崇仰禮坐須御德高利與御冠猶卑爾依奈毛殊爾有所念行天從三位乃御冠爾上奉利崇奉流此狀乎神祇大副從五位下大中臣朝臣有本乎差使天御位記乎令捧持天申奉出須神奈加聞食天天皇朝廷乎寶祚無動久常磐堅磐爾護幸倍奉賜比天下平安爾之水旱之災疫癘之憂無聞久風雨順時比五穀豐登世之給波彌高

彌廣爾榮飾利崇奉止申賜止波久申

○日本紀略一

延喜元年(醍醐)九月十五日授從三位稻荷神正三位

△扶桑略記裏書廿三(此裏書古本)

延喜元年九月十五日癸亥稻荷三箇所大明神奉授正三位

○日本紀略二

天慶三年(朱雀)九月四日丙寅奉授正二位稻荷神從一位

△驗の杉

○稻荷神の神階を國史に載られたるは上に擧たるとく貞觀十六年三前神從三位までに叙され給へり、その後は扶桑略記裏書に延喜元年九月十五日癸亥從三位稻荷三箇所大明神奉授正三位此叙位日本紀略にも見え諸神記、稻荷社の條に御位記、天慶二年八月廿八日從二位と見え、日本紀略に天慶三年九月四日奉贈正二位稻荷神從一位とあり、但し此前の正二位に

叙されし事は書どもに見えず、今考るに、天慶三年正月、諸國諸神に一階を増奉られたる事、古記どもに見えなければ、其度一階進て正二位になりておはしけるに、同年の九月、殊さらば又一階を進めて從一位を授給ひたりしなり、(神祇志料所記亦同)

○二十二社註式

稻荷社 御位記

人皇六十一代、朱雀院治十年庚子八月廿八日、從一位、○中此後諸神一階度々也、極位勿論也、(又見于諸神記、諸社根元記)

△驗の杉

稻荷の神階を國史に載られたるは、上に擧たる如く、○中かくて又永保元年二月、諸神に一階を増奉られたる事、古記に見えたり、此時進みて正一位に極り給へるなり、殊に正一位を授給ひたるにはあらず、さて諸神に、一階をに極り給へるなり、増奉られたる事、件の兩度の後にも度々ありて、古記どもに見えたり、委しき事は、かの書に記せる、官社私考の中に云へり、

○延喜神名式比保古第二畿内山城

稻荷神三社

本朝世紀、天慶五年四月十一日、坐京中并山城國諸神、位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被禱、討滅賊類、後天下諸神、可被增加位一階、之由、但至極位之神、可被奉寄封戸者、右被奉授稻荷社神階御判正一位之事、

△稻荷神社考下

此後極位に至給は、本朝世紀云、天慶五年四月十一日、今日初、請印坐京中并山城國諸神、位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被禱、討滅賊類、後天下諸神、可被增加位一階、之由、但至于極位之神、可被奉寄封戸者、とみえなければ、此時正一位授奉られたるなりけり、

△稻荷社事實考證記

御神階之事

當社正一位被奉授候年月日之事、先社家御位記應仁ニ燒失社傳之趣申

上有之候得共、更ニ廣橋前大納言伊光卿御考、内々依仰ノ儀ト拜承右年月日相知レ候ニ付、武家武邊江茂御達ニ付、文化二年九月廿三日、執奏伯三位殿江茂以來可相改旨、社司へ可申渡旨、武家傳奏列坐ニ而、伯卿へ被申渡、依之執奏家召狀到來、公林爲絢、兩人參上之處、社傳可相改、左之通書付被渡候也、

本朝世紀天慶五年四月十一日、坐京中并山城國諸神位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被禱討滅賊類、後天下諸神可被增加位一階之由、但至于極位之神、可被奉寄封戸者、

右之通候故、先達正一位ハ、應仁二年三月廿六日被授候段申上候得共、右相違之處、社傳可相改被仰渡候也、依同月廿四日、御奉行所江茂被仰渡之趣斷書付、公府親益兩人持參云云、

△稻荷社古今事實考證

正一位神階年月被仰渡、

日本紀略天慶三年九月四日、奉增

稻荷神從一位、

本朝世紀天慶五年四月十一日、坐京中并山城國諸神位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被禱討滅賊類、後天下諸神可被增加位一階之由、但至于極位之神、可被奉寄封戸者、

右被奉授稻荷社神階正一位之事、記錄出現之間、永々不可忘失之由、被仰下候、一社一同可令此旨、存知給、伯殿所傳命候者、仍執達如件、

文化二年九月

伯家雜掌左衛門尉忠久奉

稻荷

社司中

△白川伯家日記

日本紀略天慶三年九月四日、奉增稻荷神從一位、

本朝世紀天慶五年四月十一日、坐京中并山城國諸神位記五十三卷、是東西諸國賊亂之時、被禱討滅賊類、後天下諸神可被增加位一階之由、但至于極位

之神可被奉寄封戸者
右之通可覺悟旨被仰渡之御趣一社一同謹而奉拜承候仍爲御請言上候條
宜御披露頼入存候以上

文化二丑年九月

同	目代	信賢	印
同	上社神主	忠熙	印
同	中社神主	親業	印
稻荷下社神主	親臣	印	

伯三位殿

御雜掌中

社 格

○續日本後紀十五

承和十年乙丑(仁明天皇)十二月庚辰從四位下稻荷神預名神例

○延喜式三

名神祭二百八十五座

稻荷神社三座

○延喜式九

神名上

畿内神六百五十八座

山城國一百廿二座

大五十三座

紀伊郡八座

稻荷神三社並名神大、
月次新嘗、

○二十二社註式

二十二社事

人皇六十二代村上天皇治十九年、康保二年、乙霖雨經月、九天覆雲、依之、閏八月廿一日、被奉獻於十六社止、雨、伊勢、石清水、賀茂、上松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、石上、大和、廣瀨、龍田、住吉、丹生、木船等、

第六十六代、一條院治五年、正曆二年、卯、炎天送日、萬物變色、依之、六月廿四日、祈雨奉幣時、○中、被奉獻官幣、爲十九社、住吉田、廣田、北野、次第、事、可爲、

正曆五年二月十七日、祈年祭時、加梅宮、被奉獻官幣、爲二十社、

長德元年乙未二月廿五日、被奉獻臨時官幣之日、加祇園社、爲二十一社、

第六十九代、後朱雀院長曆三年卯巳八月十八日、被奉獻官幣之日、加日吉社、爲二十二社、(又見于諸神記)

○二十一社記

二十一社分賀茂下上爲二社、則二十二社也、

上七社

伊勢 石清水 賀茂 松尾 平野 稻荷 春日(又見于諸神記)

○二十二社本緣

稻荷事

中古以來、列志天官社仁、加惠上七社仁、給無上神座歟、

○朝野群載十二社內記

廿二社奉幣次第○中

稻荷

宣命紙黃紙

奉幣使○中 稻荷四位一人

○伊呂波字類抄諸仁社

二十二社○中 稻荷

○拾芥抄諸社下本

二十二社 稻荷山城、四位、一、勅使、三位、前、

○太政官日誌明治四年五月十四日
官社

○官幣大社中略

稻荷神社山城國中略

以上三十五社神祇官所祭爲官幣社

○社司月番雜記

明治四年六月十八日太政官御達

稻荷神社御改正官幣大社列自今官祭被仰出候事

辛未六月

太政官

神領

○三代實錄十

貞觀七年（天和）四月十七日丁卯勅奉充諸明神神田中略稻荷三段中略並以山城國愛宕紀伊乙訓葛野等郡得度除帳田充之

○新抄格勅符抄神封

諸神新封 本封之外合加私注付

稻荷十戸山城國 已上新封

（按ニ此新封ノ年月ハ此書伊勢大神封戸ノ條下ニ天慶三年八月廿七日奉寄トアリ之ヲ他書ト参考スルニ稻荷社ノ新封モ此時ナルベシ）

○稻荷神社古文書

雜訴決斷所牒

稻荷社

當社領加賀國味智郷内水田二十町事

右任壽永二年九月 日院廳下文并文治二年九月五日關東下文同三年三月

廿日留所下文正嘉二年二月廿七日勅裁院宣等宜令管領者以牒

建武元年九月四日

儀同三司藤原朝臣(吉田定房)

左衛門尉平朝臣

正二位 藤原朝臣(實任)

采女正中原朝臣

正三位 藤原朝臣(資明)

散位宇佐宿禰

左衛門大尉中原朝臣

主税頭中原朝臣

前伊勢守小槻宿禰

右少辨藤原朝臣

○ 花押(足利義滿)

稻荷社領浴中散在田島林名主職以下事任文永帳於當知行之在所者社家領掌不可有相違之狀如件

○ 應永三年三月廿二日

稻荷社領加賀國針道庄事於代官職號帶先神主契狀雖有申族任當知行之旨自今以後致直務可專神用之狀如件

○ 應永十八年八月廿八日

○ 內大臣源朝臣花押(足利義持)

稻荷社領加賀國針道庄事所返付社家也早退社僧等之違亂全領知可專神用之狀如件

○ 長祿二年十二月廿六日

○ 內大臣兼右近衛大將源朝臣花押(足利義政)

○ 花押(足利義政)

稻荷社領、山城國紀伊郡内散在、田島名主職以下事、早任文永帳、并當知行之旨、社家領掌不可有相違之狀如件、

寛正四年五月十二日

○大西文書

當家所持往古社領代官請書

預申稻荷御神領備後國杭庄地頭領家代官職之事

右就代官職御公用、毎年百捌貫文、此外諸公事物等、雖有之、國物志之間、先六拾五貫文分可致執沙汰候、雖然、國無爲之時者、如本々可致公用諸公事物等、社納候、萬一不法懈怠之儀候者、雖爲何時可有被代官職御改易候、其時一言子細不可申者也、仍請文之狀如件、

小早川美作守

明應二年閏四月十六日

敬平判

稻荷社神主殿

○稻荷神社古文書

當社家境内地子以下事、令免除訖、永々不可有相違者也、

天正十七

十二月朔日朱印(豊臣秀吉)

稻荷社家中

○

山城國爲山科郷替地、以稻荷廻出米十七石九斗、當知行八十八石引集、合百六石事遣之訖、全可領知候也、

天正十七

十二月十日朱印(豊臣秀吉)

稻荷社家中

○

當社領、山城國稻荷廻百六石全可社納、并境内諸役以下、令免除之狀如件、

元和元年七月廿七日朱印(徳川家康)

稻荷社家中

○

當社領、山城國稻荷廻百六石事、并境内諸役等、彌任去元和元年七月廿七日先判之旨、永不可有相違之狀如件、

元和三年七月廿一日朱印(徳川秀忠)

稻荷社家中

○

當社領、山城國稻荷廻百六石事、并境内諸役等、免除任元和元年七月廿七日同三年七月廿一日兩先判之旨、永不可有相違之狀如件、

寛永十三年十一月九日朱印(徳川家光)

稻荷社家中

○

稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等、免除任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、社家中進止、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日朱印(徳川家綱)

稻荷社家中

△諸社御朱印寫下

稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、並境内諸役等、免除任元和元年七月廿七日、元和三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日、先判之旨、社家中進止、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

○稻荷神社古文書

稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等、免除任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日、寛文五年七月十一日先

判之旨、社家中進止、永不可有相違者也、

貞享二年六月十一日

朱印(德川綱吉)

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等免除、依當家先判之例、社家中進止、永不可有相違者也、

享保三年七月十一日

朱印(德川吉宗)

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等免除、依當家先判之例、社家中進止、永不可有相違者也、

延享四年八月十一日

朱印(德川家重)

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等免除、依當家先判之例、社家中進止、永不可有相違者也、

寶曆十二年八月十一日

朱印(德川家治)

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等免除、依當家先判之例、社家中進止、永不可有相違者也、

天明八年九月十一日

朱印(德川家齊)

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等免除、依當家先判之例、社家中進止、永不可有相違者也、

天保十年九月十一日

朱印(德川家慶)

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等免除、依當家先判之例、社家中進止、永不可有相違者也、

安政二年九月十一日

朱印(德川家定)

稻荷社家中

○ 稻荷明神社領、山城國紀伊郡社廻百六石事、并境内諸役等免除、依當家先判之例、社家中進止、永不可有相違者也、

萬延元年九月十一日

朱印(德川家茂)

稻荷社家中

△京都御役所向大概覺書五

山城國中御朱印神社之事

稻荷

一御朱印社領高百六石

△日本寺社領員數記拔萃

社領

百六十石(十瑟) 稻荷明神

△諸國鎮座記

稻荷 神領百六十石(又見于日本鹿の子園花萬葉記京羽二重大全花洛名勝圖會京都巡覽記京羽津根西遊行囊抄和漢三才圖會等)

△二都巡見記亨

稻荷

社領 御朱印高百六十石餘 在稻荷村之内

○社司月番雜記

神領高之事

一往古之四至、東ハ武藏谷ヲ限、科云山西ハ油小路ヲ限リ、南ハ深草ヲ限リ、北ハ法性寺、南ヲ限リ候處、弘安三年、光明峰寺殿下、東福寺御建立以來、北方領地被滅候、其後應仁二年、於當社地、兵亂之砌、山上山下神殿舍屋記錄ニ至迄、悉ク燒失、領地モ過半失沒ニ相成候テ、必至ト衰廢ニ立至リ候處、豐臣家御治世ニ相成、天正十七年十二月、神領稻荷廻、ニテ高百六十石餘被下置、山林境

内地子已下、諸役御免除之御朱印頂戴仕、右ニ神供料トテ、猶追々御増地如、先、可被下旨被仰渡候、其後、德川家御治世ニ相成、元和元年七月、當社神領前、同様高百六十石餘被下置、境内諸役御免除之御朱印頂戴仕候、已來至、當時、聯綿仕候事、

一舊領

當時伏見御支配

稻荷御前町

同 中之町

同 榎木橋町

右往古ハ、神領ニ御座候得共、德川家康公、伏見御在城之砌、毎々御通行有之、此地、人家稀ニテ往來不用心ニ候トテ、慶長十八年十月廿四日、當社へ替地被下、右之三ヶ町ハ、伏見御支配ト相成、勝手ニ屋建御免許ニ相成候、已來、社領外ニ相成、別テ歎慨至極奉存候事、

但前之町馬場所ノ角ヨリ、北ノ石橋迄四十七間、南ノ角ヨリ、南ノ圖子小

路迄五十七間中之町ヨリ、榎木橋町石橋迄百廿一間、町屋之奧行十五間也、

右之通相違無御座候御尋ニ付奉注進候處如件、

明治二巳年十月

稻荷社一社中

神祇官

御役所

行幸

行幸行啓及御幸附皇族御參拜

○扶桑略記二十九

延久四年(後三條天皇)三月廿六日丙午(歷代皇紀作丙申)行幸稻荷祇園別當阿闍梨行禪爲

權律師此二社并日吉社行幸此時始之、

○百練抄五

延久四年三月廿六日始行幸稻荷祇園兩社(又見于歷代編年集成一代要記、皇年

二十二社註式、其他諸書、而拾芥抄、作三年正月、皇代記、作四年正月、皇年代私記、作三月廿八日)

△濫觴抄下

稻荷祇園兩社行幸

延久四年壬子三月廿六日始之、祇園別當阿闍梨源口大輔律師、

○扶桑略記

承曆元年(白河天皇)十二月一日丁丑、行幸祇園稻荷兩社、先帝例也、(又見于皇年代記)

○水左記

承曆元年十二月一日丁丑早旦參南殿今日稻荷祇園行幸也先稻荷次祇園云云相伴法印并宰相中將等密企見物辰刻許事始次第如常博陸供奉給今日初被用車又左右大將共被供奉見物了歸家今日舞人右近少將顯實左近中將家忠已上少納言基綱侍從定實右衛門佐清綱右兵衛佐長忠左馬助保俊侍從仲實左衛門少尉平時範左兵衛少尉源行實等也行事上卿中宮大夫資綱依今日當忌日不參仕仍權大納言忠家卿俄奉行之云云申刻許參法成寺事了戌刻許退出後聞被行幸賞云云稻荷社司八人加階其中六人與行事右少辨藤原伊家叙正五位下外記中原章貞史清原保俊等叙從五位下上卿并參議等不被勸賞云云

○日本王代一覽

承曆三年十月稻荷祇園行幸

○中右記

寬治五年堀河天皇八月十二日有行幸定云云○中 十月三日戊午有行幸稻荷祇園

兩社先御覽神寶等已一刻御出南殿乘輿出自西門堀河院經三條洞院東大路自萬利小路下六條是六條東面棧敷太上皇中宮有御見未一刻著御稻荷社則御禊舞人等引御馬上卿治部卿著座右兵衛督御拜了後上卿引舞人等進社頭先進舞殿二拜次讀宣命又二拜了復本座次舞人廻御馬廻舞殿次東遊了音樂三度亂聲振梓了左右如例三曲萬歲樂賀殿陵王延喜樂地久納蘇利舞賀殿之間被仰勸賞於社司六人叙爵三人叙三先例八人也次又給祿之後歸參御所公卿列立庭中之後舞人馳御馬日及西庵事了臨幸祇園社

今日行事上卿治部卿俊明參議左大辨匡房右中辨師賴大稻荷魚鱗外記定俊已上止勸賞皆依為極位歟史一人叙爵

○爲房卿記

寬治五年十月三日戊午臨幸稻荷祇園兩社其儀已刻出御葱花路出御自右衛門陣自堀川至三條東折至東洞院南折至五條更東折至萬里小路南折至六條又更東折自河原著御稻荷頓宮經小路備御路雖無先例依院宣令渡御六條殿御棧敷也殿下經五條社頭之儀如例御禊之後音樂東遊了被仰勸賞社司六人重服

追可被馳御馬事了晚頭更入御京極大路至四條東折著御祇園

○日本王代一覽

永久元年(鳥羽天皇)十一月稻荷祇園行幸

○殿曆十五

永久元年十一月廿六日癸卯今日稻荷祇園行幸也辰刻許余著束帶參內次先參院中納言相具依召參御前被賞事即參內行幸儀如常先幸稻荷社事儀如常神社行幸御禊了余向宿所右大將藤大納言別當源中納言右兵衛督宰相中將家政等也有小饗事了參御前次次儀如常社司賞八人依先例也申刻許乘輿幸祇園社

○長秋記

天承元年(崇德天皇)三月十九日丙辰稻荷祇園兩社行幸也卯時參內行事上卿中納言師賴卿參仕漸及數刻內大臣大納言經實中納言顯雅雅定實能參議忠宗雅兼行三位基隆參仕已始御覽神寶事了更出東門渡南庭次出御南殿陰陽頭家

榮反閉中間諸卿立軒廊右次將渡左中將賴長朝臣隨身小舍人童從主人渡階下隨身將後可渡於童無渡儀今如此可尋次諸卿列立自東門出御○中午始著稻荷社先著公卿座著御間諸卿出自西幔殿前庭列立北上東面御輿入南幔門荷居舍中間庭關白參後宰相中將昇御殿先上御簾取劔璽授內侍入御後歸座藤大納言又留道不參顯雅卿稱所勞由退出堀川中納言被尋云著軾人立留可揖否下官云不揖不脫沓居揖也者乃被奏宣命歸給此間立雙神寶等行事辨實親行之上卿著座立不御禊了行事參議取插花入自西幔門插冠上卿同道也事了出南幔門率舞人陪從著社頭舞人四位季成朝臣顯親朝臣五位經隆經雅能定師能光忠六位爲盛顯遠陪從四位宗章朝臣殘可尋記參社頭廻御馬七度舞左右各三回萬歲樂賀殿龍王延喜樂長保樂納蘇利見所所輕幔御所南向部舍五間中間有輕幔四面引斑幔其西有公卿借舍板葺又覆纒纒幔其座北上也立臺盤居饗膳居御所北有御厨子女官等幔幄其東有關白休所檜四面引纒纒幔御所東有舞人殿上人等幔其外諸司幄等雖多其數不能□記輕幔內大臣右衛門督下官宰相中

將許殘留社頭事了上卿於東幔外奏無爲之由著座被相語云廻御馬七匝廻拜殿云云撤東西南面御所西庭敷座南東上頭辨顯賴召諸卿從參著未參前舞人等半分上御馬馳上南藏人二人外無馳馬之人尤奇怪也無上咎敷事了轡御輿諸卿前騎更渡浮橋指入京中中後聞稻荷社司八人預賞

△日本王代一覽四

崇徳院七十天治二年十月石清水賀茂行幸アリ此以後平野大原野松尾北野稻荷祇園等ノ社ヘモ行幸アリ

○兵範記

久安五年近衛十一月廿五日癸卯今日行幸稻荷祇園法皇爲御見物夜前自鳥羽殿以御船御幸北六條殿前齋院自白川同以渡御下官著衣冠早旦參北六條殿殿上人十餘人參會頃之院出御烏丸面御棧敷齋院同所御也殿上人候庭上下北面輩同列居北辻邊齋院侍等在其末午刻前掃二人衛士頭冠老懸禪退紅布帶菜次神寶高机劔櫃公櫃唐櫃等各五荷次神祇內藏官人行事史生次舞人

中務丞平實重右近將監高階爲賴已上藏人也衛府可爲先歟而左衛門佐忠親侍從光家兵衛佐清成少納言俊長成隆左馬權頭顯定已上少將俊通朝臣同實長朝臣次供奉諸司如恒少納言能忠相副鈴次公卿中納言忠基卿以上但大納言不候次左大將內大次乘輿葱花近將相副次人長右近將監中臣重近次陪從四位伊豫守盛章朝臣修理權太夫雅國朝臣已上殿五位爲範濟房已上藏人五位才男次殿上人四位五位藏人次後陣其路出御四條內裏西面自東洞院南行自五條西行自烏丸南行自六條東行自洞院更南行先幸稻荷社頭次院入御今夕可還御鳥羽殿中于時戌刻也甚雨如沃此間天皇遷幸祇園云云東遊等如稻荷社云云亥刻還宮勸賞稻荷

○本朝世紀

久安五年十一月廿五日癸卯今日稻荷祇園兩社行幸也午刻出御內大臣中納言藤家成卿同重通卿參議同教長卿同經宗朝臣等供奉未刻著御稻荷頃宮神寶御覽御禊等如常儀中今日葺屋漏潤濕供奉女房如出自水中主上御服粗

濕損、頗非穩便事也、及子刻還御本宮四條內裏(又見于資長朝臣記)

△日本王代一覽

○百練抄七 近衛院七十六代久安五年十月(恐十一)月誤松尾北野稻荷祇園行幸、

○百練抄七

應保二年(二條天皇)八月廿四日稻荷祇園行幸也、

○玉葉

承安二年(高倉天皇)十月廿三日今日稻荷祇園行幸、上卿邦綱卿賞追可辨親宣賞、圓

宰相家道正三史隆職申請外記賴業同今日行幸無人云云、仍上皇六借給云云、

△日本王代一覽

高倉院八十年代承安二年(天)月稻荷祇園行幸、

○仲資王記

文治五年(後鳥羽天皇)己酉二月三日癸亥稻荷社行幸

建久五年十二月二日稻荷祇園兩社行幸也、裏書先稻荷次祇園云云、從二條大

路東洞院可至六條云云(又見于百練抄)

○百練抄十二

承久元年(順德天皇)十月五日丁卯行幸稻荷祇園社、

○吉記

壽永二年(安德天皇)二月五日庚子院(後白河院)自加茂鐘鳴之後令參詣祇園稻荷等給卯

刻還御、

○百練抄

正治二年(土御門天皇)二月十四日庚子御幸(後鳥羽)日吉祇園稻荷等社、

○明月記

正治二年十二月十五日未時許上皇御幸稻荷之由聞雜人說此間參大炊殿上下相待時成朝臣歸洛遣侍於稻荷令待之云云、

建仁三年八月三日天陰辰後甚雨卯時參稻荷淨衣光親辨奉行高三位等參辰時先陣漸參著巳時許御幸道者之外參會之人皆著淨衣多供奉人當時不見御

經供養里神樂等云云、還御道者供奉甚雨、最勝光院、西出川原川、東北行、自大炊御門入御京極殿南門了、退出、

建永元年五月十六日、巳時許、自稻荷還御、

同年八月十六日、御幸稻荷於鳥居內、御禊了、入御、御奉幣了、命婦御幣了、還御、入御鳥羽殿、退出女房、今日乘輿、被參入幡、有雅朝臣清邦、信經、騎馬相從、又乘車被參、稻荷同人不知、誰人、歸人宿所、即出京入九條、日暮入冷泉、

○後鳥羽院御記

建保二年五月廿日甲寅、雨脚爲滂沱、○中今日可參稻荷社、已刻由令催之、而如當時、雨脚甚密、然而何、無大明神、御計哉、仍暫相待、處已、二點、天顔快晴、雨脚止、尤所悅思也、已、三點參稻荷社於鳥居下、下輿、御禊如例、公卿以下、撫人形、此事不可、然、非熊野詣、物詣時、無此事、仍可令停止、由仰親光卿奉幣如例、按察使光親獻幣、禊陪膳同之、神主祝言如例、次獻杉葉、光親傳獻之、公卿以下、皆悉社司奉之、祝間、神馬廻之下、北面引之也、次余參命婦奉幣如例、次令下向於鳥居、下向御寶殿、方

令祈念、即乘輿、不知子細、殿上人令騎馬先行、奇快也未、一點許歸亭、

○百練抄十二

建保五年十一月十七日、上皇(後鳥羽)御幸祇園、稻荷等社、石清水宮、即還御水無瀬殿、

六年正月廿七日、上皇、女院御幸祇園、稻荷、石清水宮、渡御水無瀬殿、(又見于仁和寺日次御記)

○仁和寺日次御記

建保六年八月十三日壬子、上皇并脩明門院御幸稻荷、今熊野等社、

同年十二月廿一日己未、上皇又幸三社、(日吉、稻荷、祇園、御淨衣、)

○葉黃記

寶治二年八月五日己卯、晴、今日上皇(後深草)可有御幸稻荷、祇園兩社、(初度臨幸也、然而御淨衣、密儀、未刻可有出御之由、有仰、仍午上刻參、御所申斜出御、滿院宮被遣、不及、腰巾、)公卿冷泉大納言、公相、權大納言、公基、左衛門督、通成、子、土御門新宰相、雅家、殿上人、爲氏、資信、基具、隆行、顯方、信家、時繼、通世等朝臣、經俊、親繼、具氏等也、上北面、以良、

家國等朝臣重名永康親家敦朝藤憲說藏人下北面友景康景盛長已上五六位位騎馬六信時以下十一人步行御隨身久則持御久賴等步行出御冷泉西南門東洞院南行七條東行經橋經大和大路着御稻荷社於鳥居外下御御輿藏家卿獻御香方朝臣入御鳥居供御手水於庭上有御禊拜殿西庭也但當時無拜殿供御贈物候御冷泉大納言陪膳爲氏經俊役送陰陽助在高朝臣奉仕御祓時繼朝臣付御幣御隨身久則久賴列御馬御祓了爲氏朝臣取大麻傳大納言大納言傳供之參御寶前樓門北廊第二間社家儲御公相卿傳進御幣二捧時繼持之其殘御拜了返給之給神主親清此間時繼又加給今四本申祝廻神馬七匹祝親清進相葉裏紙敷大納言傳進退入之間賜祿大祿主典代子奉仰召神主親清仰勸賞給一階社司等賦相葉裏紙但不於公卿以下此間人々或在廻廊南或在北大納次有御經供養北廊南第六間立花机等裝佛具○第七間御導師法印長惠題名僧二口着座即仰可始御誦經之由○中次經廻廊內參御命婦御奉幣親清申祝給祿如初次還御其路有御尋或自廊門令經本路給歎之由申

○百練抄十六

建長三年二月十三日癸卯上皇藏御幸稻荷祇園社儀也

○曆代編年集成二十六

弘長二年正月廿二日一院藏新院藏御幸祇園稻荷八幡大官院

○新抄上

文永三年正月十七日辛亥○中今日一院新院先御幸祇園稻荷等之後御幸石清水宮七ヶ日可有御參籠云云

○社務所日誌

明治九年十二月十九日午前十時皇后宮行啓社務所小教院御小休夫ヨリ社

○頭江御進本殿御參拜御昇殿御式了テ山上迄御遊歩

附皇族御參拜

○御殿預荷田信郷日記

寶曆五年三月十五日今日閑院宮八幡宮并當社へ御參詣

七年七月廿五日、今日、聖護院宮御參拜、

○上社禰宜秦公杓日記

天保十年七月廿五日、聖護院宮御社參、

○社務所日誌

明治十一年五月三日、久邇宮、午後三時御社參、

十二年四月一日、久邇宮、及御家族方御參拜、

三十六年六月十九日、常宮、周宮兩内親王殿下御參詣、佐々木伯爵、及夫人、大森京都府知事、其他扈從員共、社務所ニテ御小憩ノ上、本社へ御參拜、幣帛料御奉納、玉串御進獻、夫ヨリ東丸神社御參拜之後、官司ノ先導ニテ、命婦谷マデ御散步、午前九時還御、

奉幣 附 奉納物

○西宮記

於神祇官被立奉幣使儀、大極殿燒亡後、數年被行此儀正廳東第一間、爲置伊勢幣所、○中神祇官相共裏諸社幣、裏了立於神祇官北門外東面、副垣北

賀茂 稻荷 春日 大神 石上 大和

日吉 吉田 祇園 丹生 貴布禰 以上

○西宮記 十八 臨時六

一臨時奉幣 御即位之後未行、八省之前於建禮門前進、伊勢幣使可尋依時儀、

上卿奉勅着陣仰辨、召陰陽寮令勘日時、仰外記令進令文等、無參議者辨書之、○中稻荷四位、

○西宮記 二十 臨時七

九社使

□之日當 □如恒儀、但九社、松尾、北野、同日勘日時也、

□ □賀 松 平 稻 春 原 北

○江家次第 第二月

祈年穀奉幣略○中 稻荷位四

○朝野群載內十二

○廿二社奉幣次第略○中 宣命紙、伊勢經紙、賀茂紅花、自餘社皆黃紙 奉幣使略○中 稻荷位四一人

○伊呂波字類抄伊呂波

稻荷宣命紙黃、使四位

○二十二社註式

二十二社次第幣數 上七社略○中 稻荷三本

○神祇正宗

稻荷大明神賀茂氏四位一人、勅使一前

○文德實錄四

仁壽二年秋七月乙亥、遣使者向賀茂、松尾、稻荷、貴布禰等名神奉幣祈雨、即日得

歷朝奉幣

甘藷

○三代實錄三

○貞觀元年（清和天皇）九月四日丙辰、分頭遣使奉幣賀茂御祖、別雷松尾貴布禰、乙訓、稻荷等神社、止霖雨也。

○三代實錄十三

貞觀八年七月十四日丙辰、班幣賀茂御祖、別雷松尾丹生川上、稻荷、水主貴布禰神、賽前日、禱兼祈嘉藷也。

○三代實錄十四

貞觀九年五月三日辛丑、班幣畿內諸神、祈止霖雨、告文曰、天皇我詔旨、止稻荷神、乃廣前爾、申給倍申久方今百姓乃耕種、乃時奈而自去四月霖雨不止、天農業流、損之、倍皇神乃厚助爾、依天此灾波可止毛、所念行、須故是以神祇少副正六位大、中臣朝臣有本乎差使、天禮代乃幣帛乎、令捧持、天申奉出、須此狀乎、神奈加聞食、天降雨忽霽、天風旱之災、比不起五穀無損、久天下饒足、米之賜、比天皇朝廷乎、寶祚

无動久常磐堅磐 爾夜守日守爾利護幸奉賜止倍申賜止申
十一月十二日丁未遣使於賀茂御祖、別雷、松尾、稻荷略中等神社奉幣、先月祈五穀、今以賽焉、

○三代實錄二十一

貞觀十四年三月廿三日癸巳、今春以後、內外頻見怪異、由是各遣使者、諸神社奉幣、使於近社道場、轉讀金剛般若經略中神祇伯從四位下藤原廣基為稻荷社使、

○三代實錄二十三

貞觀十五年五月廿日癸未略中奉幣於賀茂、松尾、乙訓、稻荷略中神並祈嘉澍也、

○三代實錄二十四

貞觀十五年七月九日辛未遣使於賀茂、松尾、稱荷略中神社奉幣祈雨也、

○三代實錄二十七

貞觀十七年六月三日甲寅分遣使者於山城、國賀茂、御祖、別雷、松尾、稻荷略中七社奉幣以祈嘉澍也、

七月二日壬午遣使班幣賀茂御祖、別雷、松尾、稻荷略中八社祈雨也、

八月廿五日乙亥奉幣伊勢及賀茂御祖、別雷、松尾、稻荷略中社祈秋稔也、

○三代實錄三十一

貞觀十九年陽成天皇四月九日庚辰辰刻始構造大極殿略中先是奉幣伊勢大神宮、

石清水八幡大菩薩宮、賀茂御祖、別雷、松尾、平野、稻荷等神社、

元慶元年六月十四日癸未奉幣石清水八幡大菩薩宮、並賀茂御祖、別雷、松尾、稻

荷略中祈甘雨也、

○三代實錄三十三

元慶二年六月三日丁卯自去年至此元陽不雨、名山大川能興雲致雨、班幣祈雨、賀茂御祖、別雷、松尾、稻荷略中是也、

○三代實錄三十五

元慶三年五月廿一日庚戌奉幣賀茂御祖、別雷、松尾、稻荷略中等神社祈膏雨也、

○三代實錄三十七

元慶四年二月五日己丑遣正五位下行神祇大副大中臣朝臣有本於稻荷社奉幣告以大極殿成

五月十六日己巳廼者膏雨難得農民稍愛是日遣使者於賀茂御祖別雷松尾稻荷○中等社奉幣祈雨

○三代實錄四十三

元慶七年五月廿二日丁亥遣使者於松尾賀茂御祖別雷稻荷○中等社奉幣而雲以早也

○三代實錄四十四

元慶七年七月十三日丁丑○中略賀茂御祖別雷松尾稻荷○中等社遣使班幣○中略先是六月廿七日鷲集大極殿鴉呼今月三日巳往霖雨淹旬河水溢漲內外略

愁陰陽寮占奏言主上可患疾病亦天下將憂風水故豫祈神明至是賽焉

九月二日乙丑奉幣賀茂松尾別雷貴布禰稻荷○中等神社祈止雨也

○三代實錄四十八

仁和元年光孝天皇九月廿三日癸卯分遣使者於賀茂上下松尾稻荷○中社奉幣

○三代實錄四十九

仁和二年八月七日癸丑自去四日霖雨至是大風雨洪水分遣使者於賀茂上下

松尾稻荷○中社奉幣祈止雨○告文略之

○西宮記九月

例幣○中略

延喜十五年醍醐天皇九月七日此日石清水賀茂上下松尾平野大原野稻荷等奉幣是依天下之赤痢病也

○本朝世紀

天慶二年朱雀天皇六月十二日壬午依祈雨奉幣諸社石賀上下松平稻

五年六月廿日壬申是日臨時奉幣使進發諸社兼有祈年穀也仍廢務伊勢石清水賀茂上

下松尾平野稻荷○下略

○日本紀略四

天曆十一年(村上天皇)三月四日辛卯奉幣六社石賀松、平稻原、依天變恠異也、

天德元年十二月七日己未奉幣諸社石賀松、平稻、○下略

二年九月十七日甲子奉幣七社石賀松、平稻、春原也、

四年三月廿二日辛酉奉幣十二社伊石賀松、平稻、春原、神上、和住、

同年十一月十九日乙卯○中於八省院被發遣諸社奉幣使伊石賀松、平稻、

應和二年六月十一日丁酉奉幣伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷○中等祈止霖

雨、

三年七月十五日乙丑於八省院奉遣伊勢以下二十八社幣帛使依祈雨也伊石

賀松平稻○下也

四年二月廿八日乙亥奉幣伊勢以下諸社石賀松、平稻、春、

康保三年五月廿五日己丑奉幣諸社伊石賀松、平稻、春、依賀茂社鳴也

同年閏八月廿一日壬午爲止雨奉幣十六社

△二十二社註式

二十二社事

人皇六十二代村上天皇治十九年康保二年乙丑(按二年、二年、三年誤)霖雨經月九天覆雲、依之閏八月廿一日被奉獻官幣於十六社止雨、

伊勢石清水賀茂上松尾平野稻荷、○下

○日本紀略六

貞元二年(圓天皇)二月十五日丙午奉幣於七社伊石賀松、平稻、春、

○日本紀略七

永觀二年(花山天皇)十一月十三日己未奉遣伊勢以下十一社幣帛使伊石賀松、平稻、春、依祈晴、

○日本紀略九

永祚元年(一條天皇)九月七日乙酉於八省院奉幣伊勢石清水賀茂松尾平野稻荷等、依大風損也、

正曆四年五月七日甲子奉幣伊勢石清水賀茂平野稻荷北野等依臨時御祈也、

○日本紀略十

長德元年十月十二日乙酉依行幸御祈奉幣七社伊石賀松平稻春也

長保二年三月廿三日庚子發遣六社奉幣使伊石賀松平稻春也依造宮也

同年十月廿七日庚午奉幣八社伊石賀松平稻春原

○法成寺攝政記

寬弘二年二月壬生本御堂記作正月廿七日乙巳依參大原野給事奉幣諸社○中稻荷春

日大原野梅宮吉田等諸大夫行之初有內文事同行之云云

○日本紀略十一

寬弘七年閏二月九日己未於八省院奉幣二十一社依祈年穀也又被申明年當

三合厄前後年有閏月可有御慎之由神祇官陰陽寮所申也仍伊石賀松平稻○

社別被副進神寶東遊

○小右記

寬仁元年後一條天皇八月七日壬申今日承行諸社奉幣事蝗蟲御祈稻荷遠理四位

同年十一月九日癸卯今日巳二點被立七社奉幣使行幸賀茂日無風雨霜雪之事也稻荷則隆四位

○左經記

寬仁元年十一月九日癸卯○中今日奉幣以來廿五日可有賀茂行幸無事妨可

令遂給由被祈申伊勢石清水賀茂平野松尾春日稻荷等

○日本紀略十三

寬仁三年四月廿一日戊申奉幣伊勢大神宮以下十社依刀伊國賊徒事也伊石賀松

平稻○下略

○日本紀略十四

長元二年五月二日庚申天皇幸八省院發遣伊勢奉幣使還宮之後於仗座立諸

社使石賀松平稻○下略

○平記

長曆元年後朱雀天皇四月二日今日奉仕宮御裝束昨日依日次不宜也今日於宮有

奉幣定、三日丙午、早且召外記貞任、令書告文、中次大夫召使等次第給之隨退出、小使等取御幣、退出、石清水、賀茂上下、松尾、平野、稻荷、散位隆春日、大原野、吉田

○春記五

長曆三年二月十七日癸酉、中今日被立、奉幣使等、早且皇后宮大夫參入、奏宣命、云云、稻荷使、信長

○玉葉廿四

天喜六年後冷泉天皇三月十五日乙酉、七社奉幣、石賀、松、平、稻、春、原

○水左記

承保四年白河天皇九月三日庚戌、此日依若宮御惱、被奉幣、帛神馬等、於諸社、石清水、平野、稻荷、春日、賀茂、水、有告文、大內記敦基作之、云云、

同年十一月九日丙辰、此日可有行幸稻荷、祇園之由、被奉幣、十社、云云、伊勢、石清水、尾、平野、稻荷、春日、大原野、賀布、福、北野

○本朝世紀

寬治元年堀河天皇八月七日丙戌、中被定、五社奉幣使、中九日戊子、被立、五社奉幣、伊世、石清水、稻荷、下略、被行御卜、成崇神社等也、

○中右記二

寬治四年二月廿七日壬戌、上皇白河曉有奉幣、稻荷社使、官內少輔顯隆云云、五年正月廿八日戊子、今日午時、中宮立后之後、初有奉幣、諸社使、中八社、石清水、賀茂、上下、松尾、春日、大原野、平野、稻荷、已上四位、吉田五位

同年二月廿七日丙辰、有行幸奉幣、廿二稻荷使、俄闕了、仍被用五位、是亦先例也、

○後二條關白記

寬治六年二月十六日己巳、晚頭頭辨來云、祈年穀奉幣、被行承給之由、承了、十七日、晴、黃昏、參於內着、右仗余行之事、如常、被仰宣命、趣辭別等、仰事三合、年天下公家可慎之由、可被仰也、依觸穢、不參、追被仰事、如常、召外記、云云、中廿二日乙亥、晴、令外記申殿使、事可被尋仰也、中廿四日丁丑、辰刻雨降、參右仗、中向八

省着座間幣物具否如常召外記使事被問稻荷使令申未參之由仰重可令催由裏書宣命記

天皇我詔旨度掛畏支大神能廣前仁恐美恐美申給波久申久食者民之天奈農者政之本奈方春戒節天人以天耕種須而風雨順時天稼穡有年牟事波大神乃厚支御助計廣支御意可在奈所念行毛奈故是以吉日良辰乎擇定天官位姓名乎差使天禮代乃御幣令捧持天奉出給布掛畏支大神此狀乎平久聞食天東作乃春與西收乃秋麻天風水旱蝗乃難不聞須農業蠶養乃勤叶期天皇朝廷乎寶位無動久常警堅磐仁夜守日守護幸奉給比天下泰平仁海內清寧仁護恤へ恐美恐美申給波久申辭別天申給波久今年波公家可有御慎加上仁曆運乃所推呂已當三合天種々乃厄難可發幾由乎有司奏上り世其乃咎徵不輕須聞食天畏懼大坐天之殊凝淑誠給天令致祈請給布大神此狀乎聞食天件等乃不祥厄會乎未兆之前仁拂退給天玉體安穩仁貽首歡樂仁護幸へ恐美恐美申給波久申

寬治六年二月廿四日

○中右記四上

寬治八年四月九日己卯天晴郁芳門院有臨時七社奉幣依有殊催參仕御禊陪膳未時許使參集先別當修理大夫俊綱朝臣承仰召大內記在良令草告文則入覽管啓之後給使使略○中隆宗朝臣稻荷祇園

○中右記六

寬治八年七月廿日己未天陰大雨有祈年穀奉幣廿二社略○中稻荷使基實朝臣略後聞上卿今朝早參被奏宣命草并清書有辭別近曾天變頻示世間不閑風雨順時農業可叶節之由者

○中右記八

寬治八年十一月廿日戊午天陰雨雪共下例幣并臨時廿二社奉幣也略○中上卿召諸社使給宣命略○中稻荷義綱朝臣

○中右記九

嘉保二年四月十一日丙子、天晴、賀茂行幸御祈、七社奉幣也。○中稻荷使清家朝臣、

○本朝世紀

承德三年二月廿七日庚子、被立祈年穀奉幣使、稻荷四位、各申故障、美作守基隆朝臣、依宣旨勤之、

康和元年閏九月二日庚子、中官職被立八社奉幣使、石賀、松、平、以殿上人爲使、有告文云云、依御惱也、

○清原重憲記

康和五年十月十二日戊午、雅俊、基綱等參入、被定石清水、賀茂、行幸御祈七社奉幣使、伊、平、稻、是去秋比、依霖雨被行御卜、

○本朝世紀

康和五年十一月七日壬午、被立五社奉幣使、伊、平、稻、是去秋比、依霖雨被行御卜、有崇之故也、權中納言能實行事、

同月十九日甲午、賀茂行幸延引、仍被立七社奉幣使、伊、石、賀、松、被謝申此由也、○

略 今日稻荷使、右京大夫定實朝臣、又見于少外記、清原重憲記、

○殿曆七下

長治二年八月八日壬申、晴、今日九社奉幣、伊勢、八幡、賀茂上下、春日、奉幣使、公卿參議殿上人四位、上卿右大將、無御拜、依不例御也、

○永昌記

嘉承元年七月廿六日壬子、細雨時々灑、今日又御物忌、可有九社奉幣、行事藏人有忠奉仕、略、中稻荷使、兼平朝臣、

○中右記十二

嘉承元年十月三日辛酉、今日臨時有奉幣十社、依爲使已刻許、參內上卿春宮大夫、被奏宣命草之間也、略、中稻荷春日祇園、日吉、北野、已上殿上人、或社者當方角、辰巳或社者殊被祈申、主上從、去月十九日玉體頗不例御、仍被行御卜之所、角、神社崇、仍殊有此奉幣也、宣命之趣隨社各異、

○中右記十七

嘉承三年(鳥羽天皇)三月廿三日(裏書)皇后宮初有奉幣八社云云使官司殿上人石清水賀茂、松尾平野、稻荷春日、大原野、吉田、吉田一社五位、餘皆四位也

○中右記十九

天仁元年八月七日甲申今日祈年穀奉幣也略○中 稻荷使宗季朝臣、天永三年十月十三日丁酉今日新造大炊殿御祈奉幣也八社略○中 召稻荷使給宣命、

永久二年八月朔日癸卯今日有稻荷一社奉幣上卿治部卿是中社穢事被謝申云云、

○殿曆十六

永久二年八月一日癸卯天晴今日不出行公家稻荷社有奉幣去比於社頭修行者僧一人被殺害了仍件社頭有穢爲謝件事所被立也依穢問奉幣遲々上卿治部卿殿曆十八

永久四月十一月十八日丁未天晴今日臨時祭試樂也略○中 又有稻荷社奉幣云云、

○通季卿記

永久五年三月三十日甲申天陰小雨今夕新造皇居御祈八社奉幣也上卿忠教卿別當行事藏人頭右大辨顯隆是造營行事也後聞八社奉幣之間松尾梅尾使宰相中將信通俄申障仍左大辨兼兩社使又稻荷春日等使有所勞於門外以外記給宣命、

○殿曆十八

永久五年十月卅日甲申天晴午後雨下參内之間甚下今日遷宮奉幣内記持參宣命草也略○中 今日奉幣八社伊勢賀茂下上、松尾、稻荷、平野、春日、大原野

○中右記十九

永久六年正月廿九日壬子略○中 皇后宮初有奉幣八社云云稻荷散位家宣朝臣元永三年二月九日庚辰行幸御祈奉幣上卿按察使大納言稻荷使宗季朝臣、保安元年六月三日壬申今日右大將參仗座被定申臨時奉幣使日時等云云是

依可有御慎殊撰社可被奉幣者來八伊勢八幡賀茂平野稻荷○中八日有臨時奉幣上卿右大將云云稻荷近江守重仲朝臣行事右中辨雅兼朝臣

○中右記別本十一

大治二年(崇德天皇)三月廿三日天晴今日祈年穀奉幣也二ヶ度延引也上卿内大臣行事右少辨宗成申時使使立稻荷親朝臣宣命辭別心柱神被喰損事神祇官燒亡事大神宮穢出來之由奉幣度々延引之由

同年十月廿六日壬午秉燭之間參内爲定申五社奉幣使也頭中將一日仰下也是先日霖雨御卜成崇之方角社也○中奉幣諸社使稻荷前陸奥守源朝臣家俊是同年十一月六日壬辰陰雨不下今日五社奉幣也予依爲上卿參内○中召内記大内記宗光來仰可進宣命之由是去秋霖雨之間令官寮卜之處巽乾大神依不信不淨成崇又理運者仍伊勢平野稻荷祇園北野社中不淨被尋之處祇園北野社邊骸骨多遺檢非違使等被掃治了殘二社雖無見穢物只被謝申由也次召稻荷使家俊朝臣云云

○中右記別本十三

大治四年二月十四日癸亥天陰祈年穀奉幣也○中召稻荷使散位源季房朝臣所勞之間候門外以外記傳給

同年七月六日壬午祈年穀奉幣也上卿内大臣行事右中辨師俊朝臣○中稻荷時俊朝臣

同年十月四日今日行幸御幣上卿治部卿行事右中辨師俊(中略)稻荷經敏朝臣

○中右記十四

大治五年二月十八日辛卯今日祈年穀奉幣也予依爲上卿早旦沐浴祓辰刻參内○中稻荷親仲朝臣

同年三月五日丁未今日中宮奉幣也稻荷使修理大夫顯盛朝臣

同年四月八日己卯今日松尾北野行幸御祈九社奉幣云云上卿民部卿行事左

中辨實光左大史俊重稻荷顯親朝臣

同年七月十七日丁丑今日祈年穀奉幣也上卿民部卿忠教卿行事右中辨師俊

使稻荷時俊朝臣

天承二年四月十七日、○中有奉幣定三社廿七日伊勢松尾渡稻荷、

同年五月九日戊辰臨時有廿二社奉幣是依被行世間疾疫有此奉幣予爲上卿
○中召稻荷使實房朝臣給宣命、

同年六月廿四日癸丑有三社奉幣、伊勢松尾稻荷先日稻荷社司候申云爲深草下人社邊樹木數百本被切取者遣實檢使被注之處四五百本被切了其後不被沙汰得長壽院供養日逢非常赦也今日宣命樹木切事恐思食由許被載天切木輩可行罪之由不被載頗恐事歟又念行罪之間自逢非常赦由云云可被申事歟凡切樹木輩事今日宣命不被書載頗不得心之由密密雖示頭辨不沙汰何爲哉猶可被奏聞事歟

長承二年二月廿一日丁未祈年穀奉幣上卿左大臣行事右少辨俊雅稻荷使爲重
同年八月二日甲申祈年穀奉幣也予爲上卿已初參內、○中稻荷爲重朝臣雖爲院殿上依有仰也

三年二月八日戊子祈年穀奉幣云云上卿源大納言行事右少辨俊雅稻荷使大炊頭爲重使三人、○中宣命有辭別公家御慎事云云

同年六月四日今日有軒廊御卜上卿按察大納言近日涉旬霖雨不晴依何咎崇所致哉宜令神祇官陰陽寮卜申官依有神事違例可有公家御慎之上辰巳方神崇歟寮爲理運之上乾巽方神社依神事穢氣所致歟今夜則被勘奉幣日時也、乾巽方神社者伊勢稻荷平野北野祇園十四日壬辰今日依止雨奉幣五社上卿按察使大納言行事權

辦公行伊勢稻荷平野祇園北野御卜所當方角社等也稻荷使知信朝臣、
四年四月廿一日甲子今日有臨時廿二社奉幣予爲上卿已時許參內召大內記令進宣命草披見之處天下疾疫事從去九日霖雨不晴事被祈申也稻荷使土佐守顯保朝臣給宣命、

保延元年六月廿六日戊辰今日五社奉幣也稻荷櫻木倒事、○中召稻荷使備中守家長給宣命、

同年八月七日戊申依催申時許參內依奉幣定也、○中是霖雨成崇方角社依可

有奉幣也、巽方稻荷、十二日可有奉幣十二社也、稻荷知信朝臣、件十二社、官寮共卜申之方角社也、

○清原重憲記

康治三年近衛天皇二月十三日戌刻、内大臣移外座、參議顯業卿又着座、被定、祈年穀奉幣○中

陰陽寮

擇申可被奉遣、祈年穀奉幣使於諸社日時、

今月十九日 庚子 時 午二點

康治三年二月十三日

權大夫博士安倍朝臣時近
頭兼權陰陽博士賀茂朝臣守憲

奉幣諸社使

伊勢

石清水

賀茂上下

松尾

平野

稻荷散位藤原、時昌 改散位藤原、光業

十九日及辰終、參陣依祈年穀奉幣也、

○本朝世紀

天養元年八月廿九日被立、九社奉幣使、伊勢春日石清水賀茂平野稻荷○下略依御不豫事也、上卿

權大納言宗輔卿、

久安三年二月六日庚子、依春日行幸、御祈廿二社被奉幣、大膳大夫藤師綱朝

臣爲稻荷使、

同年八月十七日、今日被立、祈年穀奉幣使、稻荷皇太后官權大進高階爲基、

四年三月十九日丁丑、祈年穀奉幣也、稻荷大舍人頭高階朝臣家行、

五年七月廿九日戊申、今夕權大納言伊通卿參被立、松尾北野行幸、御祈九社奉

幣使

松尾北野行幸御祈九社

天皇我詔旨止掛畏岐某太神乃廣前爾恐美恐美申賜止波久申久八月十日松尾仁廿日北野仁行幸志給志倍臨彼時且風雨乃難不令有須內外乃障不出來須淑情乃任爾令遂給止波卒古掛畏岐太神乃厚御惠廣御助仁可依度所念行且毛故是以吉日辰辰乎擇定且官位姓名乎差使且禮代乃大幣乎令捧持奉出給布太神此狀乎平久安久聞食且天皇朝廷乎實位無動久常磐堅磐爾夜守日守爾護幸倍給且比國家安穩爾黎庶豐饒仁護恤給止倍恐美恐美申賜久止申

久安五年七月廿九日

上卿大宮大納言

使稻荷有成朝臣

同年十一月十六日甲午今日稻荷祇園兩社行幸御祈被立奉幣使略中

奉幣諸社使

稻荷散位藤原朝臣有成

○台記別記

久安五年十一月卅日戊申今日美福門院自熊野令下向給入夜著鳥羽殿略中於船津有御禊被立稻荷幣先達爲御使云云

○本朝世紀

仁平元年四月廿三日甲子今日爲天下饑饉之御祈被發遣伊勢以下九社幣帛使伊勢石清水賀茂上下左大臣參仗座奏宣命草事了參著八省昭應門座行事參議教長卿公通朝臣爲使
天皇我詔旨止掛畏支某大神乃廣前仁恐美恐美申給止波久申久國波以養民爲寶之君波以施仁天爲本須因茲古之明王毛仰神鑒天偏祈治世之術幾况年末之小子非冥德波爭廻攘灾之謀乎而去年能孟秋爾州縣旁遇風水之難爾今春以後都鄙爾粗有饑饉之苦其旨遠聞驚支殊歎太座古無限志偏是朕加菲薄

爾依民乃 菜色有加 恐懼之至 寤寐不 休掛畏 幾大神鎮護 乃誓不 誤天志豐饒 乃世爾 早成給止 倍所念行 卒奈故 是以吉日 良辰乎 擇定天 官位姓名 乎差使禮代 乃大幣乎 令捧持 豆奉出給 布大神此狀 乎平久安 久聞食天 天皇朝廷 遠寶位無動 久常磐堅磐 仁夜守日守 仁護幸給 比天下爾 曾天無水旱之煩 久四海悉誇農桑 之業良國富俗豐 爾之無為有截 乃御代止 護幸賜止 倍恐美 恐美申給 波久申

仁平元年四月廿三日

同年八月二日己巳今日爲石清水賀茂行幸御祈奉遣七社奉幣使稻荷日向守藤有成朝臣

二年三月十八日癸丑被定申七社奉幣日時等當日依石清水賀茂行幸御祈也
略○中奉幣諸社使稻荷日向守藤原朝臣有成

三年二月十四日癸酉祈年穀奉幣也但馬守長成朝臣爲稻荷使

天皇我詔旨登掛畏支某大神乃廣前爾恐美恐美申賜波久申久農者天下之大 本穀者邦家之重寶奈因茲天每迎上春爾懇開五土幾當屬孟陽天播蒔百穀里多

風雨若順者禾穡豐穰利稼穡能登者民俗富淳志是以往昔乃君王毛祈穀於上 帝里勸農於下土牟上以羞宗廟社稷免下以瞻群庶民隸奈度稟其皇猷天致此 懇念須上天降鑒志明神加祐天東作不忘天一老擊壤南畝有利天餘糧留蓄 登波古大神乃廣支御助爾可在度奈里所念行奈故是以吉日良辰遠擇定天官位姓 名遠差使天禮代乃大幣遠令捧持天奉出賜布掛畏支大神此狀遠平久安久聞 食天耕耘乃春天里與收穫乃秋節天萬霽澤順時比灾蝗削跡天桑蠶如心久朝野有 樂天天皇朝廷遠寶位無動久常磐堅磐仁夜守日守爾護幸倍給止倍恐美恐美申 賜止波久申

仁平三年二月十四日

○山槐記

久壽三年後白河天皇二月十日今日祈年穀奉幣也行事藏人式部丞俊光奉仕御裝束使稻荷能定朝臣

應保元年二條天皇七月廿八日己亥略○中來月廿日平野行幸同廿五日大原野行幸

仍今日可被發遣九社伊石賀松平奉幣也稻荷使能定云云

○兵範記

仁安二年(六條)六月十九日乙酉今日進發廿二社奉幣去頃初齋官御在所大姫
 蜷集出前庭弘三尺許長一丈其積不知數官寮卜占其趣御慎甚重仍被謝申也稻荷重雅朝臣
 同年閏七月四日己巳祈年穀奉幣稻荷前中務少輔季經朝臣依無地下人俄被用雲客此條無謂
 同年十月十五日己酉天晴卯刻參院今日被發遣十二社奉幣來廿五日日吉御
 幸御祈先例有限之儀式也稻荷中務權大輔經家朝臣
 三年(高倉)七月十七日丙子巳刻參內午刻權大納言公保卿參議家通朝臣參著
 仗座次召辨下官參軾云云被仰可令勘申祈年穀奉幣日時由召大內記光範被
 仰宣命略中使稻荷中務權大進資泰朝臣
 四年二月七日甲午天晴巳刻參內皇太后宮依日吉行啓今日被發遣十社奉幣
 使也稻荷中務權大進經家朝臣
 同年二月廿四日辛亥今日祈年穀奉幣巳刻皇太后宮大夫公保卿參著仗座先

覽宣命草次召藏人治部少輔兼光奏聞略中稻荷使前民部少輔盛方

○玉葉十

承安二年十月廿日稻荷祇園御雜奉幣上卿五條中納言

○玉葉十一

承安二年閏十二月十二日丙子陰晴不定略中今日十二社奉幣也是御不豫事
 被謝申云云十三日丁丑略中昨日奉幣事上卿三條大納言宣命兼光草之依幣
 物諸國難濟及深更被立幣是御不豫之時被行御卜之處方角相當神社被謝申
 之伊勢石清水賀茂稻荷大原野日吉祇園等也

○玉葉十三

承安三年七月廿五日丙辰此日祈年穀奉幣也稻荷使季長朝臣云云

○顯廣王記

承安四年六月十七日裏書炎旱御卜可有成崇社社五社奉幣伊勢八幡大原野
 稻荷祇園未被定云云廿七日壬午五社(玉葉作七社)奉幣稻荷口馬權頭隆信朝臣(見)

部子伯家類

同年八月十八日壬申、祈年穀奉幣、中

裏書 上卿源大納言實房卿、行事、右少辨親宗、職事、左衛門權佐光雅、使、四位前民部少輔盛方、稻荷

○玉葉十五

承安五年二月十一日癸亥、天晴、此日、祈年穀奉幣也、上卿子并經房、職事、光雅、中 略 光雅就軾仰曰、中 疱瘡事、可載、諸社、宣命者、次召、稻荷已下、使使給之、

○玉葉十九

安元二年正月廿八日癸酉、天晴、此日、春除日、初日也、余奉仕、執筆、於春初、自、今日三箇日、奉幣於十箇寺、八橋賀茂上下、稻荷、春、大原野吉田、、中 略

○吉記

安元二年五月十二日丙辰、今日、有、廿二社奉幣、天下不靜、御祈也、上卿藤大納言、辨左少辨兼光、稻荷、隆信、

○顯廣王記

安元三年二月廿四日甲午、依、疱瘡天變、被立、九社奉幣、稻荷、清通朝臣、又見子伯家部類

○玉葉二十三

安元三年二月廿五日乙未、天晴、中 昨日被發遣、九社幣、上卿三條大納言、辨經房云、使、稻荷、治部卿顯信朝臣、

○山槐記

治承三年二月廿九日丁巳、被發遣、祈年穀奉幣、稻荷、前下總守藤原朝臣高佐、同年三月一日己未、被發遣、平野行幸奉幣、稻荷、散位橋朝臣以政、

○吉記

治承五年安德天皇四月廿日乙丑、今日、祈年穀奉幣也、去月奏、宣命、上卿參、神祇官之後、無、故延引、今日被果、行、也、使、稻荷、高佐朝臣、同年五月十九日甲午、今日、被立、廿二社奉幣、使、蓋、是、明年三合厄、御祈、也、兵亂、事同、被、申、云、云、上卿源大納言、行事、辨權右中辨光雅朝臣、使、稻荷、攝津守以、改朝臣、

養和元年八月十日、今日、祈年穀奉幣定也、稻荷前下總守藤原朝臣高佐

壽永元年八月廿九日丁卯、昨日、祈年穀奉幣定云云、今日、皇后宮、被立八社奉幣使、稻荷侍從成家、

二年二月廿八日癸亥、今日、祈年穀奉幣也、上卿新大納言、忠使、稻荷、高佐朝臣、奉行、左少辨光長、

文治四年後鳥羽天皇五月廿一日丙辰、此日、痘瘡御祈十二社奉幣也、伊勢、松尾、稻荷、春日、日吉、大社上

御下、外依、要須加之、上卿、右大將實房卿、辨權、右中辨定長朝臣、奉行、職事宗隆等也、略、○下、同年七月一日甲子、今日、祈年穀奉幣也、上卿、花山院大納言、兼稻荷、伊豫守季長朝臣、

○玉葉六十三

建久元年五月三日丙辰、此日、中宮藤原任子八社奉幣也、使等略、○中、稻荷左少將定家朝臣、同年八月廿八日庚戌、天晴、此日、止雨十社奉幣也、伊、石、賀、松、平、稻、春日、北、祇等也、此中、北、祇等、當、御卜方角社也、

○玉葉七十

建久四年正月四日、壬晴、略、○中、此日被立十二社奉幣使、伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、日吉、祇園、北野、貴布禰、八幡已下、四位公卿使、如例、稻荷、春日、大原野、已上殿上人、

○仲資王記

建久五年閏八月八日、裏書來十五日、十三社奉幣云云、伊勢使差支、今日持來、昨日召使盛安來、云、十四日、御方違行幸、十五日、十三社奉幣使、可勤仕云云、伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、住吉、日吉、廣田、祇園、北野、

○玉葉七十二

建久五年閏八月十五日、申、此日十三社奉幣也、依、天變恠氣及天下魔緣競起、所、所謠言驚耳、又主上、今年御惱上、九月爲、太一家御厄、如此、之間、所被行也、上卿、大宮、大納言實宗卿、行事、左中辨親經朝臣、公卿之外、諸社使被用、殿上人、大原野已上四位、伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、住吉、日吉、廣田、祇園、北野等也、

○猪隈關白記

正治三年(土御門天皇)二月七日戊子、或晴或陰、時々雨下、此日祈年穀奉幣也、巳時參內、先有祓事、直着陣外座、略中、次召稻荷以下、使次第給宣命、各着膝着給之也、

○三長記

建永元年二月廿八日巳卯、今日被發遣祈年穀奉幣使、上卿中納言道家中將殿初令奉行給、被用神也、巳刻參神祇官、略中、奉幣使、略中、

稻荷

散位源朝臣長俊

同年八月七日丙辰、今日被發遣祈年穀奉幣使、藏人方予奉行之、略中、稻荷、可用位、之由、申觸產之由也、

○明月記

寬喜三年(後堀河天皇)正月廿九日丙辰、明日十三社奉幣云云、晦日丁巳、今日奉幣當

日定稻荷範

○平戸記

仁治三年(四條天皇)八月卅日乙亥、晴、略中、後聞今日祈年穀奉幣及深更發遣稻荷使、事奉行藏人侍從忘却、今朝始沙汰之間、闕如云云、何如此、遲々云云、希代事歟、

○百練抄十五

寬元三年(後嵯峨天皇)十二月廿九日庚寅、被發遣稻荷一社奉幣使、又被行軒廊御卜、同社燒亡事、

○葉黃記

寶治元年(後深草天皇)七月十三日甲子、祈年穀奉幣也、上卿左府辨、親教藏人方、宗雅使々、稻、以良朝臣、

○岡屋關白記

建長二年庚戌、六月十六日、今日依止雨奉幣、伊勢以下十社、是去十日被卜之處、成崇神也、稻荷家盛朝臣、

○康富記

建長三年六月五日甲子、被發遣、八社奉幣使、稻荷、散位藤原朝臣範昌、

○仁部記

弘長二年(龜山天皇)二月十九日乙巳、今日、被發遣、祈年穀奉幣使、使々、稻荷、前越前守橋

○勘仲記十一

弘安九年(後宇多天皇)三月六日癸酉、爲春日行幸御祈、被發遣、廿二社奉幣、稻荷、刑部大輔三善俊衡朝臣、

同年十月十日癸卯、今日、被發遣、七社奉幣、兼日、事、顯世奉行、依霖雨、被行、御卜、方角、神成、崇之由、卜申之間、被謝申、其後、連連延引、今日、被果、遂當日、頭卿奉行、上卿三條新中納言、公貫卿、辨、兼仲奉行、稻荷、則任朝臣、

○實躬卿記

弘安十年十月八日、晴、今日、入歸、午刻於、稻荷社、奉幣云云、

○勘仲記十一

弘安十一年(伏見天皇)四月廿五日己卯、(此間虫損)奉幣諸社使、稻荷、前越前守三善朝臣師衛、

正應元年八月廿四日丁丑、早旦、爲藏人大輔顯世奉行、被仰下云、祈年穀奉幣、今日猶可被行、可存知之由也、申承之由、即小浴解除未刻參內、雖早參、上卿內大臣、遲參及、數刻、秉燭之後、上卿參陣、新宰相信輔朝臣同著陣、先御即位之由、大奉幣日時定也、職事顯世、宣下上卿、其詞云、御即位、由、可被奉幣、天神地祇、日時、并大祓日時令、勘申、中上卿召、使使、給諸社、宣命、稻荷、建業朝臣、

○續史愚抄

正安四年(後二條天皇)二月十六日辛巳、被發遣、祈年穀奉幣、中使、稻荷、四位、實躬卿記

○實躬卿記 十九

嘉元四年九月廿五日癸巳、天霽、今日、祈年穀奉幣發遣日也、中使、稻荷、四位使也、

○高大府記

○延慶四年(花園天皇)四月廿五日被發遣九社奉幣使(伊勢、八幡、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、丹生、貴布禰)依病事御祈也(又見于續史愚抄)

○官公事抄 五

應永九年(後小松天皇)十月廿三日陰陽寮擇申可被奉遣御幣於諸社日時(續史愚抄)今月廿三日癸酉時午點若甲

應永九年十月廿三日 頭兼曆博士賀茂朝臣在方

奉幣諸社使○中

稻荷

散位 平朝臣 知高

△康富記 七

應永九年十月廿三日癸酉被發遣八社奉幣使稻荷藤原朝臣知高(又見于續史愚抄、野史、愚抄、作散位、知高朝臣)

○續史愚抄

應永廿六年八月十七日癸丑此日被發遣祈年穀奉幣稻荷使左兵衛權佐平時

基○薩

戒記

○康富記 四

應永廿七年八月廿五日辛酉今日祈年穀奉幣發遣也上卿權大納言滿季卿○略上卿以召使召稻荷使佐兵衛權佐時基就賦賜宣命(又見于續史愚抄)

○看聞日記

應永廿八年五月廿三日雨降今日諸社奉幣被行稻荷行豐朝臣參向是飢饉病事御祈云云(歷代殘闕日記探錄)

○續史愚抄

應永三十一年三月九日乙酉被發遣祈年穀奉幣○中使稻荷侍從藤原行豐兼宣記公

○薩戒記

應永三十二年五月一日庚午傳聞今日被發遣祈年穀奉幣上卿藤大納言隆光

使稻荷殿上四位也

三十三年三月十一日乙巳、天晴、今日被發遣、祈年穀奉幣也。中上卿三條大納言、公雅辨、左少辨資親也、使稻荷侍從行豐朝臣、

○續史愚抄

應永三十四年三月九日丁酉、依御惱被發遣、六社奉幣使社々未詳、宣命、文章博士某草之、大內記某、輕服、故云、使稻荷、雅兼朝臣薩戒記

○師鄉記

正長二年後花園天皇八月廿二日丙申、被發遣、八社伊石賀松平稻春原奉幣使、是來廿九日遷幸御所也、先於陣、有日時定、上卿按察大納言資宗卿中稻荷散位藤原行豐朝臣、午前被始行之又見于官公事抄、續史愚抄

○薩戒記

永享二年二月十七日戊子、傳聞今日被發遣、祈年穀奉幣、藏人權右少辨嗣光、以下藏人相兼奉行之、上卿藤大納言隆光使、稻荷前宮內卿行豐朝臣、

○師鄉記

永享三年五月十七日庚寅、今日被發遣、祈年穀奉幣使、先於陣被勘日時、上卿藤大納言隆光卿、參議中山宰相中將定親卿、權右少辨嗣光奉行職事、兩局周枝宿禰師世朝臣六位外記親種、史盛久少內記、召使行繼、陰陽寮不參歟、中稻荷行豐朝臣、

○薩戒記

永享五年二月廿八日壬子、今日被發遣、祈年穀奉幣也。中

奉幣諸社使

稻荷

散位藤原朝臣行豐、

○管見記

永享八年二月十二日、天晴、或小雪、續紛、今日、祈年穀奉幣發遣日也。○中公卿、使、着座之後、予召、使、使、略、欲、召、稻荷、使、之處、使、遮、而、參、入、之、間、則、給、宣、命、殿、四位、使、嘉元三、如此、

○師鄉記

永享九年二月廿二日壬午、雨下、祈年穀奉幣也、午刻許、先於陣、被定、日時、并使、使、上卿、萬里小路大納言、○時房卿、稻荷、行豐、朝臣、又見、予、看、聞、日記、十年二月三十日、晴、祈年穀奉幣也、先於陣、定、上卿、三條大納言、實覺卿、稻荷、行豐、朝臣、

○建內記

永享十一年二月十三日辛卯、今日、祈年穀奉幣也。○中、稻荷、使、時兼、

△師鄉記

永享十一年二月十三日、祈年穀奉幣、先陣、定也、上卿、按察大納言、參議右大辨、執筆、奉行、右少辨、俊秀、兼、官、方、大外記、師勝朝臣、六位外記、親種、史盛久、兼、內、記、陰陽

寮頭、在成朝臣、有季朝臣等參陣、官務依、輕服、不參陣、儀了、被引本官、其儀如例、
○中 稻荷、時兼、朝臣、

○建內記

永享十二年二月十七日庚寅、祈年穀奉幣也、上卿、藤大納言、俊宗卿、稻荷、侍從、爲、秀、

○師鄉記

嘉吉元年二月廿五日癸巳、祈年穀奉幣、先於陣、被定、日時、上卿、萬里小路大納言、參議右大辨宰相、執筆、辨俊秀奉行、職事、教忠、○中、稻荷、五位左少辨、昌宗、

○建內記 伏見宮御本四

嘉吉元年六月廿日、丁酉、今日、依辛酉御祈、被發遣、廿二社奉幣使也、稻荷使、左衛門、

△師鄉記

永享十三年、此歲、改、元、嘉吉、六月廿日乙酉、今日、辛酉御祈、廿二社奉幣也、先有陣、定、上

鄉三條大納言殿參議右大辨宰相辨資重職事藏人佐教忠兩局師世朝臣時繁六位外記家久史員職少內記等參陣陣儀了被引本官云云、
稻荷行豐朝臣、

○建內記十二

嘉吉二年三月廿二日戊申祈年穀奉幣也日時使等定同日也稻荷侍從爲季、殿上人

△師鄉記

嘉吉二年三月廿四日晴祈年穀奉幣也先於陣被定日時以下上卿三條大納言殿○中稻荷朝臣將實治

○康富記

嘉吉二年十月十九日丙午依禁裏御不豫御腫被發遣七社奉幣使者也又見子抄
一奉行藏人右少辨教忠也自元御祈奉行也、

奉幣諸社使○中

稻荷

左近衛權中將藤原朝臣雅親

宣命

天皇我詔旨度掛畏支某能大神能廣前爾恐美恐美申賜者久申久以薄德耳膺
洪基禮臨民者古度雖疎毛敬神者古度期深志故爾萬機安全能計度古偏爾大神如在
能力爾任勢爰爾不測耳御惱能事在利若不信神事能違例爾依禮留又邪魔怨
族能成崇爾依禮留縱不祥能可至幾難有毛已爾冥鑒能可助幾非無須早久聖
祈能懇情乎照志玉體能平痊乎得給止者牟所念行耳奈故是以吉日良辰乎撰定
耳官位姓名乎差使耳禮代能大幣乎令捧持耳奉出給布掛畏支大神此狀乎平
久安久聞食耳時日乎不過耳速爾除愈乎令得免給耳實算延長爾景福無疆爾
耳口泰平能衛護乎垂給耳千秋萬歲能遐齡乎受給耳天皇朝廷乎寶位無動久
常磐堅磐爾夜守日守爾護幸倍奉給度恐美恐美申賜者久申

辭別豆申賜者久申久今月二日戌時爾太白犯斗勢利觀臺能所奏呂占文不輕
須神明能冥鑒乎非施者爭加星霜能大變乎拂牟妖不勝德須善必除殃豆遙追
宋景退舍之蹤比須享殷宗延祚之慶瑤圖無恙久實曆萬安爾護恤奉給倍恐美
恐美申賜者久申

嘉吉二年十月十九日

文安元年七月廿二日己亥是日祈年穀奉幣也去二月分也依武家要脚未濟度
度令延引今日所被發遣也略○中今年甲子去年三合彗星出現等事被載宣命辭
別者也略○中稻荷右兵衛權佐藤原朝臣教秀又見子

○師鄉記

文安三年八月廿八日甲子祈年穀奉幣也先於陣被勘日時上卿中御門大納言
宗繼奉行頭中將親通朝臣略○中稻荷左中將基有

○官公事抄七

寶德元年八月廿三日辛未被發遣祈年穀奉幣使上卿權大納言隆夏卿以下參

行文安四五年去六月廿八日豐受大神宮恠異之事被載宣命辭別

△康富記

寶德元年八月廿三日辛未是日被發遣祈年穀奉幣使者也文安三年八月廿
八日被發遣之同四年五年兩年遂以不被行之中絕不可然之由武家被執奏
申之有興行矣略○中使稻荷從五位上侍從藤原朝臣雅保

○兼胤公記

延享元年櫻町五月十九日丙申今日七社奉幣發遣日時定并使定也稻荷中務
冬輔朝臣廿二日己亥是日發遣七社奉幣也右大臣著陣被奏宣命其後參向神祇
官代吉田齋使使賜宣命各具幣物參某社使々交名見主上渡御南殿有御拜
幣如例

△續史愚抄

延享元年五月廿二日己亥被發遣七社奉幣使先有宣命奏上卿右大臣道香
使使略○中稻荷中務大輔冬輔朝臣先人御記資與朝臣記家記或記公卿

△御殿預荷田信名日記

延享元年五月廿二日官幣使御參向一式之記如左

午下刻許勅使堀川中務大輔冬輔朝臣御到着

刻限勅使御參向於鳥居下從長柄下給此時祠官等去床下裾進出爲上首先

向勅使一揖而左右列行而進祠官之先拂衛士著素襖左右列行到樓門石段

之下北方退去躡居

勅使之供奉童二人布衣數輩退紅白丁等被召具也先拂之青侍者自當社爲

御馳走氏子五箇村之郷士十人宛左五人於樓門石段之下南方退去御手水

之間躡居

勅使於樓門石段之下南方御手水有之豫西南二方引幔設置御手水之具桶一口載柳筥檢杓一本御手拭奉書二枚挿檢割木

勅使入解除屋給樓門石段上北方建新此時氏人祓串載祓机令持神人一膜

從祓屋之西北進出居祓机於勅使傍退

勅使取祓串令祓給畢而撤祓机退西北此間祠官等著座拜殿之東左右西面
勅使昇拜殿給

勅使著拜座給先小拜畢而再拜

次讀宣命給畢而再拜畢而目祠官給此時正禰宜起座進拜殿於階下一拜昇

簀子拜伏膝行勅使前受宣命昇神殿

宣命別記採錄

天皇 我詔旨 止掛畏 汝稻荷 乃大明神 乃廣前 爾恐 美恐 美申賜 者久申 久去享

保二十年恭以薄德 氏天津日嗣 乎受傳 與倍氏 以降天下太平 爾志 近年神事公

事等 乎再興 留世事 者偏 爾大明神 乃廣 岐御恤 爾依 氏奈所念行 氏奈 故是以吉

日良辰 乎擇定 氏從四位上行中務大輔藤原朝臣冬輔 乎差使 氏禮代 乃御幣

乎令捧持 氏奉出賜 布此狀 乎平久安 久聞食 氏天皇朝廷 乎寶位無動 久常磐

堅磐 爾夜守日守 爾護幸給 止倍恐 美恐 美申賜 者久申

辭別 氏申 久今年甲子 爾當禮 慎謹至重 久恂慄殊篤 志益仰神威 岐長垂嘉瑞

氏無爲事爾可有乎古登掛長岐大明神此由乎聞食氏實祚延長爾四海清平爾護惠賜止倍恐美恐美申賜者久申

延享元年五月廿二日

次正祝權預起座進神前

次權預捧持幣殿之官物并目錄共昇神殿傳正祝一揖而下殿復本座

次正禰宜正祝宣命幣物奉下社之案上一揖而退下

次正禰宜返昇拜殿申返祝詞拍手二

次勅使起座令下拜殿給

勅使入御休所給祠官各昇殿群列而進神前著座如神供式獻神酒五社各一膳宛准神幸勅祭之神酒獻供畢而各祈啓勤行畢而從下社撤之撤畢而下簾各拜宣命并目錄宣命者黃紙目錄者奉書有上包幣物菰包也宣命者新調之桐宮入目錄共幣物之唐櫃入奉納下社之御內陣也

○篤長卿記

明和五年後櫻町天皇十一月十三日今日七社奉幣也上卿右大臣辨裏松辨稻荷高倉右兵衛權佐

△續史愚抄

明和五年十一月十三日丁酉被發遣七社奉幣先有宣命奏有辭別見上上卿右大臣輔平使々稻荷右兵衛權佐永範中奉行藏人頭右大辨伊光朝臣享

元年以後今度被行七社奉幣者○愚紳家抄年代略記

△御殿預荷田信郷日記

明和五年十一月官幣使御參向之記

十月廿四日伯家ヨリ御用召ニ付上神主松本駿河守爲雄權預羽倉石見守信邦伺候之處伯殿御對面ニテ今度依御願奉幣使被爲立候諸事延享元年甲子奉幣之時之通ニ候旨被仰出日時者來月上旬ニ候旨具ニ被示下

廿七日伯家ヨリ御用召ニ付參入候處伯殿御對面書附被相渡如左

稻荷使、永範朝臣私云、永範朝臣者、高倉右兵衛權佐殿也。

一七社奉幣發遣日時定來月九日、同發遣來月十三日、内々御治定候事、右之通被仰出候旨、伯殿御達也。

廿九日、白川殿へ參入、次第書二通持參也、如左、

官幣使參向社頭次第

刻限、祠官參進奉仕、神殿御裝束豫、開置、内陣之御具。

次各下殿出、鳥居下待、勅使參向、

次勅使參向、入、鳥居給此時祠官等奉迎、一批而先驅、左右列行。

次有勅使手水之事、

次著解除屋給、

次進解除之具於勅使、

次祠官各著座拜殿東、左右、南、上、西面、右、北、上、西面。

次昇拜殿西階著座給、

次官人持參官幣盛於幣殿案上、

次勅使讀宣命給、讀訖召祠官、

次社務昇拜殿東階、一揖、膝行于勅使前、請宣命、

次社務參神殿奉宣命於神前、

次正禰宜昇神殿待階下、

次權目代捧持官幣昇神殿傳正禰宜正禰宜取之奉神前而下殿、

次社務參拜殿申返祝詞拍手。

次勅使退下、休所入給、

次祠官等更參進神殿、

右奉書四ツ折認調進也、

十一月二日晴、滋井殿高倉殿爲内見、御社參下神主以下御對談有之、其後拜殿ニ而修禮有之也、

滋井殿仰云、當社ニ而杉之事古例相見候、此度勅使江杉ヲ奉候ハ可然於一

社存寄無之候ハ、内々攝政殿江被相伺可有御再興旨也云云、

六日高倉家ヨリ御用召ニ付相摸守參上候處雜掌左衛門面會此間被仰談

候杉葉之儀攝政様へ被相伺御再興被仰出候則次第御渡被成候旨而略

次第被相渡如左、

神主申返祝詞復座、

次正祝持杉葉使取之取副於笏正祝復座、

次使起座杉葉裏本於紙居折敷使不取折敷取枝取副於笏

七日高倉家江言上書持參如左、

謹而言上

一此度官幣使御參向之節杉之儀依古實御再興被仰出畏奉存候右取役之

儀正祝江被仰付候此儀神主職掌之儀古例准據承元四年八月五日上皇御幸之節神主親清奉相葉ノ

古例ヲ御座候得者此度社務江被仰付被下爲神主代正祝勤仕候様ニ被

仰付被下候得者一社一同畏可奉存候此段宜御披露頼入存候以上、

明和五年十一月

五人連印

高倉右兵衛權佐殿

御雜掌中

八日高倉殿江昨日之伺ニ參上候處昨日言上之趣被及御沙汰候上次第御

渡被成候、

官幣使參向社頭次第

刻限一、

中略

次社務參拜殿申返祝詞拍手

次正祝社務與奉取相葉持參勅使御前、

次勅使起座、

右之通可相心得旨雜掌ヨリ被相達候也、

九日伯家ニテ被仰渡候書付如左、

一今度七社奉幣使被爲立候處延享之例稻荷社者三前卜有之候得共此度五前へ官幣御奉納被遊候由被仰出候被相心得候様依伯殿仰如此候也

伯家雜掌

十一月九日

稻荷

御殿預殿

目代殿

追テ神祇官奏請之寫壹通爲後來被相渡候也

別紙

神祇官

請石清水賀茂松尾平野稻荷春日幣料之事略

稻荷

五前略

右所奉幣料所請如件

明和五年十一月九日

從五位下行大祐紀朝臣春昌

十三日今日官幣使當日也
未刻勅使高倉右兵衛權佐殿御到着

一社司中束帶相整社頭以下設之儀相整參詣ヲ留メ萬事無子細前後相調
則勅使へ御案内申上

一勅使永範朝臣御參向

一鳥居下ニテ下乗社司各出迎一揖直ニ社頭ニ進ニ著座

一勅使手水屋ニ著給

一解除屋ニ著給氏人解除之具ヲ進メ解除之詞ヲ申ス勅使解除之作法有之

一勅使拜殿之西階ヨリ昇リ著座給

一衛士御幣物薦包持參案上ニ置退去

一勅使二拜訖テ讀宣命給讀訖テ二拜後下神主ニ目シ給下神主進テ拜殿階下沓揖昇階而膝行而進勅使之左方宣命拜受退而一拜下階無沓揖石

壇ヲ登リ引砂ノ中ヲ行キ昇神殿案上ニ宣命ヲ奉リ内陣ニ座ス、
宣命(別記採録)

天皇我詔旨止掛畏岐稻荷大明神乃廣前爾恐美恐美申賜止者久申久去寶曆
十二年朕以眇身氏不圖毛天津日嗣乎受傳倍天下知食古及數年利倍天下太
平爾志殊者仁今年立皇太子氏且加首服古止偏爾大明神乃擁護爾依禮故是
以氏吉日夏辰乎擇定氏從四位下行右兵衛權佐藤原朝臣永範乎差使氏禮
代乃御幣乎令捧持氏奉出給布此狀乎平久安久聞食氏天皇朝廷乎實祚無
動久常磐堅磐爾夜守日守爾護幸給止恐美恐美申者久申

明和五年十一月十三日

- 一 正禰宜爲社務與奪神殿ニ進引砂階下北ノ方ニ候ス、
- 一 權目代神前ニ進案上之幣物薦ヲ解キ布包斗ヲ捧持而昇階南ノ幣物
ヲ正禰宜ニ渡シ復座、
- 一 正禰宜幣物ヲ捧神前案上下殿復座、

一下神主下殿而昇拜殿杏揖申返祝詞拍手二

一 勅使揖而拍手給下神主一拜而下階復座

一 正祝爲神主與奪昇神殿持豫所納置之杉葉下殿昇拜殿奉於勅使勅使取

杉葉取副於笏給正祝折敷ヲ持下階復座

一 勅使起座下西階入休幕給

一 社司次第ニ昇殿如常著座神酒獻上訖而下殿

一 寶藏ニ納置候幣物送文之寫

大藏省

奉送稻荷社幣料之事

五色繩 五匹

白繩 二匹

木綿 四斤

絲 二約

麻	十兩
太布	一端
右	

稻荷社幣帛料所奉送如件

明和五年十一月十三日

大藏省年預大石弘亮

○七社奉幣日次(神祇伯資延王)

享和四年甲子(光格天皇)二月廿四日今日辰刻七社奉幣發遣也

一稻荷社江名代使内藤織部

右兩人衣體如先年直垂也

一申刻從稻荷社注進勅使着之由也

申半刻過同注進勅使作法相濟由

一戌刻從稻荷社織部歸無滯相濟候由申聞也

稻荷社官幣使參向社頭之儀

刻限、祠官參進、奉仕、御裝束、豫開置神殿御戶

次、祠官列立于鳥居内、奉迎

勅使、參向

次、勅使參向、令入鳥居給

此間祠官一揖、而先駈、左右分列、爲先下廳

次、勅使於樓門石階下有手水儀、氏人役之

次、令着解除屋、氏人進解除具

次、祠官着座、拜殿左右西面、左北上、右南上

次、官人置御幣物於中門外案上

次、勅使昇自拜殿西階、令着座給、敷疊一帖

次、勅使令讀、宣命給、此間祠官讀訖、目社務

次、社務昇拜殿東階、進於勅使座前、勅使給宣命

次、社務參進、奉宣命于神前

次正禰宜社務與奉參進于 神殿氏人取御幣物傳于權目代權目代傳于正禰宜正禰宜捧持奉于 神前下殿復座

次社務復進于 勅使座前申返祝詞手訖復座

次正祝社務與奉參進于 神殿取來相葉折敷兼置持參於 勅使座前

勅使令取相葉不令取折敷

次勅使退下令入休幕給

此時祠官各起座列立南面 東上向子 勅使而一揖

次神饌祠官各參進于 神殿御陪膳手長 役送如常

次勅使令還出給祠官列立于鳥居內奉送一揖 勅使各揖給

△上社神主秦忠熙日記

勅使御參向點檢雜記

享和四年正月廿一日七社奉幣使今日內々相定

稻荷 公陳朝臣川鱈少將

一來月當社へ官幣勅使御參向之儀被仰出諸事明和五年十一月十三日勅使御參向之節之通候也

○二月廿四日七社奉幣稻荷公陳朝臣參向

宣命(別記探錄)

天皇 我詔旨止掛畏岐稻荷乃大明神乃廣前爾恐美恐毛申賜止者久申朕眇身

乎茂天日嗣乎繼氏志以降天下泰平爾志殊爾近年波殿造毛稍古爾復利公

事毛障久遂行留事者皆大明神乃助護給爾依利天奈仰岐崇備給布自今後毛

四海波無久八隅知食牟事者偏爾御助乃厚爾岐在止夏之所念行牟奈故是以吉

日夏辰乎擇定氏正四位下行左近衛權少將藤原朝臣公陳乎差使氏禮代乃

御幣乎令捧持氏奉出賜布此狀乎平久安久聞食氏天皇朝廷乎寶祚無動久

常磐堅磐爾幸護給止恐美恐毛申賜止者久申辭別氏申久今年者慎御須倍甲

子乃年爾遭盤奴禮益御助爾賴久欲伎隨爾夙爾夜爾祈任志給布繼比來奈禍

止毛級戸乃風乃天乃八重雲乎吹放事乃如久禍止云布禍遠被除伎給牟事

乎掛畏岐大明神奈加良毛聞食氏皇國益治聖壽彌長久護惠給止恐美恐美毛
申賜波久止久申

文化元年二月廿四日

○白川資訓王記

文久四年(孝明天皇)四月二十四日午今日七社奉幣被發遣一付

稻荷社江 備前守代

安部田正親

右之通為名代差向候處○中稻荷社未刻等官幣無滯相濟候也

稻荷社御勅使四辻中將等ヨリ無滯相濟候旨届被申越

一清閑寺頭辨江兩社官幣御奉納無滯相濟候段四ツ折を以届差出畢

○實麗卿記

元治元年四月廿四日甲午今日七社奉幣發遣也上卿内大臣忠參議山科宰相
言使稻荷社右中將公賀朝臣等參向奉行豐房朝臣云云

○言成卿記

元治元年四月廿四日今日依甲子被立七社奉幣使○中上卿於神祇官召七社
使賜宣命云云公卿賜次官於稻荷
△御殿預荷田信義日記

元治元年四月廿四日甲子官幣勅使四辻中將殿御參向上巳ノ總テ延享之御
例ニ被復三前江御奉幣御式相濟候事

官幣使參向社頭之儀

刻限神祠官等參進奉仕御裝束豫開置殿御戶

次祠官列立于鳥居内奉迎勅使參向

次勅使參向令入鳥居給此間祠官一揖而先驅左右分列

次勅使於樓門石階下有手水儀

次令著解除屋給氏人進解除具

次祠官著座拜殿東左右西面
左北右南上

次官人置御幣物於中門外案上

次勅使昇自拜殿西階令著座給

次勅使令讀宣命給此時各敬屈讀訖目于社務給

次社務昇自拜殿東階進於勅使座前勅使授宣命給

次社務參進奉宣命于神前

宣命(別記採錄)

天皇我詔旨止掛畏岐稻荷乃大明神乃廣前爾恐美恐美申賜者久申朕庸昧乎以氏忝久天日嗣乎繼與利既爾十八年乎過止奴禮幸爾四海波平爾公事毛無障久例乃隨爾遂行留事者偏爾大明神乃助護賜爾依氏奈崇敬賜布自今以後毛八紘無事久天下知食事者御助乃厚爾岐在奈志止所念行故是以吉日良辰乎擇定氏正四位下行右近衛權中將藤原朝臣公賀乎差使氏禮代乃御幣乎令捧持氏奉出賜布此狀乎平久安久聞食氏天皇朝廷乎實位無動久常磐堅磐爾夜守日守爾護幸賜止恐美恐美申賜者久申辭別氏申久今年者

甲子爾當利深久慎御岐倍厄運乃期者禮尙毛御助爾賴氏安穩爾日月乎送

久止朝暮久止奈所念賜布縱比來奈禍止毛未爾攘比未萌爾除岐賜倍抑又

比年夷賊等乃皇國乎覬覦比互市乎求爾事乎寄氏國澤乎奪取須留事情驕

慢爾志國內乃窮弊且夕爾逼奈形勢乃不安乎寢毛氏寤毛氏憂賜比危賜布如

是禍乎攘除事者人力乃所不及奈庶幾者久早久冥險乎垂賜比彼等乎千里乃

外爾放退計神威乎四表爾輝志國富民給免賜倍掛長岐大明神神奈加聞

食氏彌天下太平爾五穀豐饒爾實祚延長爾武運悠久爾護幸賜止恐美恐美

申賜者久申

元治元年四月廿四日

次正祝社務與春參進于神殿氏人取御幣物傳于田中社祝田中社祝傳于正祝正

祝捧持于神前下殿復座

次社務復進于勅使座前申返祝詞拍手訖復座

次權禰宜社務與春參進于神殿取來相葉相葉之本以紙裏之居折敷豫置神殿底持參於勅使座前

勅使令取相葉給相葉懷中不令取折敷給上

次勅使退下令入休幕給此時祠官各起座而立南面東上向于勅使而一揖

次神饌祠官各參進于神殿御陪膳手長役送如常

次勅使令還出給祠官列立于鳥居內奉送一揖

○御殿預荷田信義日記

明治四年(天皇)十一月八日東京大嘗會被爲行候一付奉幣使參向社頭之次第如左

社頭之式

早旦神殿裝束奉仕

第八字地方官及神官等著座

先開扉宮司之ヲ奉仕ス

奏樂

次神饌ヲ供ス宮司以下神官之ヲ奉仕ス

奏樂

訖ヲ神官一同列座拍手拜

次知事御幣物ヲ捧ク拍手再拜

次祝詞知事之ヲ奏ス拍手再拜

掛卷母恐伎稻荷乃神社乃大前爾京都府知事正三位長谷信篤恐美恐母白

久新代乃始乃大御典止今年十一月中卯日爾天都御食乃遠御食止天皇乃

大嘗聞食賀爾故爾宇豆乃幣帛乎和妙荒妙爾御饌津物備奉氏奉出給布故今

日乃生日爾是乃大前爾捧介奉良久美爾聞食氏天皇乃大御代乎千秋乃五

百秋爾彌長久是乃國內乎安國乃足國止堅磐爾常磐爾守利幸閉給止恐美

恐母美白須

明治四年十一月八日

次知事以下地方官拜禮奏任以上玉串ヲ捧ク

次御幣物及神饌ヲ撤ス御幣物ハ後神庫ニ納ム

奏樂

次閉扉

官司之奉仕ス

奏樂

次各退出

畢

○社務所日誌

明治五年三月五日、祈年祭奉幣、京都府知事長谷信篤参向、

六年一月八日、新嘗祭奉幣、(客年十二月改曆ノ爲メ延引)

三月十八日、祈年祭奉幣、京都府知事長谷信篤参向、

十一月廿三日、新嘗祭奉幣、京都府西尾大屬代参、

七年二月廿一日、祈年祭奉幣、京都府知事長谷信篤参向、

十二月一日、新嘗祭奉幣、京都府知事長谷信篤参向、

八年三月八日、祈年祭奉幣、京都府七等出仕谷口起孝参向、

十一月廿五日、新嘗祭奉幣、京都府七等出仕谷口起孝参向、

九年二月廿日、祈年祭奉幣、京都府参事國重正文参向、

十二月六日、新嘗祭奉幣、京都府七等出仕谷口起孝参向、

十年二月四日、本日、午後三時、御代拜御使、式部助丸岡莞爾参著、直様奉幣式執

行、大官司以下各奉仕、

一御幣帛料金拾五圓御奉納、

式次第

當日、神殿裝飾、其他取設總テ例祭之通、被舎ハ無之

午後三時、使以下、社頭ニ参向、

次御幣櫃ヲ砌上ニ置ク、

次大官司、昇殿開扉、此時使以下着床官員起

此間奏樂

次少官司以下、神饌ヲ傳供ス、

此間奏樂

次大官司、先二拜、祝詞ヲ奏ス、畢テ又二拜、側ニ候ス、此間使以下着床官員起

次式部屬、御幣物ヲ執テ、階前ノ案上ニ置ク、

次大官司、御幣物ヲ神前ニ供ス、

次式部屬、祭文ヲ執テ、使ニ付ス、

次使、參進先二拜、祭文ヲ奏ス、又二拜、

次大官司、使ノ前ニ進ミ、祭文ヲ請ヒ、之ヲ神前ニ納メ、畢テ返祝詞ヲ申ス、使之

ニ應ス、

次使、退出、

次御幣物、并神饌ヲ撤ス、

此間奏樂

次閉扉、

此間奏樂

次各退出、

祝詞

掛卷 母 恐 支 稻荷神社 乃 大前 爾 大官司正七位安江靜恐 美 恐 母 美 白 左 今度式部
助丸岡莞爾 乎 御使 止 爲 豆 齋祭 世 良 給 布 故 爾 御食御酒魚菜種々 乃 物 乎 備奉 豆
仕奉 米 志 給 布 事 乎 聞食 止 恐 美 恐 母 美 白 須

明治十年二月四日

祭文

天皇 乃 大命 爾 任 世 掛卷 母 恐 支 稻荷神社 乃 大前 爾 式部助正六位丸岡莞爾 乎
使 止 爲 豆 白 給 止 波 久 白 左 今度畝傍山東北陵後月輪東山陵 乎 大御親齋祭 利 給
爾 布 依 豆 此 京 爾 駐 世 良 給 布 故 爾 大前 爾 御幣帛奉 利 齋祭 世 良 給 布 事 乎 聞食 止 白 給
布 天皇 乃 大命 乎 聞食 止 恐 美 恐 母 美 白 須

明治十年二月四日

三月五日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝參向、

十一月廿七日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一年二月十六日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月廿七日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十二年二月十九日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月三十日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十三年二月十九日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月廿五日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十四年二月廿二日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月廿六日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十五年二月廿日、祈年祭奉幣、京都府知事北垣國道参向、
 十一月廿七日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十六年二月廿三日、祈年祭奉幣、京都府大書記官國重正文参向、
 十一月廿四日、新嘗祭奉幣、京都府大書記官尾越蕃輔参向、

十七年二月十九日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月廿五日、新嘗祭奉幣、京都府大書記官尾越蕃輔参向、
 十八年二月十七日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月廿五日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十九年二月十九日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月三十日、新嘗祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 二十年二月廿四日、祈年祭奉幣、京都府少書記官谷口起孝参向、
 十一月廿六日、新嘗祭奉幣、京都府書記官尾越蕃輔参向、
 二十一年二月廿日、祈年祭奉幣、京都府書記官尾越蕃輔参向、
 十一月廿六日、新嘗祭奉幣、京都府書記官尾越蕃輔参向、
 二十二年二月十五日、憲法發布奉告ノ爲勅使、京都府書記官尾越蕃輔参向、本
 殿裝飾其他總テ例祭ニ同シ、
 式次第

午後二時、勅使并宮司以下、幄舎ニ入ル、勅使手水、
宮司、昇殿開扉、

此間奏樂

次禰宜以下、神饌ヲ供ス、

此間奏樂

次宮司祝詞畢、幣物ヲ献ス、

次勅使、昇殿祭文ヲ奏シ、幄舎ニ復ス、

次勅使、拜殿ニ於テ玉串ヲ献シ、拜禮、

次地方官員拜禮、

次宮司以下拜禮、

次神饌ヲ撤ス、

此間奏樂

次閉扉

此間奏樂

次各退出、

祝詞

掛卷母恐伎稻荷神社乃大前爾宮司正七位近藤芳介美恐美白久今度皇室
典範乎定米皇御國乃憲法乎制定米發布志給布事乎告奉留爲豆京都府書記
官正六位尾越蕃輔乎差使豆齋祭世給布故爾大前乎慎敬比御酒波藝上高知
藝腹滿並豆鱸乃廣物鱸乃狹物奥津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至留万置足波
豆仕奉米良志給布事乎聞食止世恐美恐母美白

明治二十二年二月十五日

祭文

天皇乃大命爾坐世掛卷母恐支稻荷神社乃大前爾京都府書記官正六位尾越
蕃輔乎使止爲豆白給止波久白久今度大朝廷乃掟豆止志皇室典範乎定米又惟神
奈大伎政乃隨爾受繼治米給留食國乎平穩爾安寧久天下公民庶爾福祉乎得

世志給止爲豆皇御國乃憲法乎制定米發布志良給布故此狀乎告奉留爲豆御幣
帛奉利齋祭世給布事乎聞食豆天皇乃大御代乎動久事無久左夜具事無久彌
益益爾常石爾堅石爾守幸倍給止倍白給布天皇乃大命乎聞食止恐美恐母白須

明治二十二年二月十五日

三月二日、祈年祭奉幣、京都府書記官尾越蕃輔參向、

十一月廿四日、新嘗祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

二十三年二月十九日、祈年祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

五月四日、御代拜(京都御)勅使、主殿助宇田淵參向奉幣、

十一月九日、新嘗祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

二十四年二月十九日、祈年祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

十一月三十日、新嘗祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

二十五年二月廿五日、祈年祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

十二月二日、新嘗祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

二十六年二月廿七日、祈年祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

十二月十五日、新嘗祭奉幣、京都府書記官森本後凋參向、

二十七年三月一日、祈年祭奉幣、京都府參事官甲斐宗治參向、

十二月九日、新嘗祭奉幣、京都府參事官甲斐宗治參向、

二十八年二月廿五日、祈年祭奉幣、京都府參事官大槻龍治參向、

十一月廿九日、新嘗祭奉幣、京都府參事官大槻龍治參向、

二十九年二月廿日、祈年祭奉幣、京都府參事官大槻龍治參向、

十二月十五日、新嘗祭奉幣、京都府書記官本部泰參向、

三十年十二月九日、新嘗祭奉幣、京都府書記官本部泰參向、(今茲一月、皇太后宮

無之)

三十一年二月廿八日、祈年祭奉幣、京都府書記官山田春三參向、

十二月二日、新嘗祭奉幣、京都府書記官青木磐雄參向、

三十二年二月廿二日、祈年祭奉幣、京都府書記官青木磐雄參向、

十一月廿九日、新嘗祭奉幣、京都府書記官青木磐雄参向、
 三十三年二月廿七日、祈年祭奉幣、京都府参事官宇佐美勝夫参向、
 十一月廿八日、新嘗祭奉幣、京都府参事官藤本充安参向、
 三十四年二月廿三日、祈年祭奉幣、京都府参事官藤本充安参向、
 十一月廿七日、新嘗祭奉幣、京都府参事官藤本充安参向、
 三十五年二月十八日、祈年祭奉幣、京都府参事官藤本充安参向、
 十一月廿八日、新嘗祭奉幣、京都府参事官藤本充安参向、
 三十六年二月十七日、祈年祭奉幣、京都府参事官藤本充安参向、
 十一月廿七日、新嘗祭奉幣、京都府参事官藤本充安参向、
 三十七年二月十七日、露西亞國ニ對スル宣戰奉告トシテ、勅使、京都府知事大森鍾一、参向奉幣、社頭ノ式次第左ノ如シ、

式次第

當日早旦、官司、神殿ヲ裝飾ス、其裝飾ハ例祭ニ同シ、

午前十一時、勅使参著、屬官二名、警部四名、隨從、官司以下、樓門外石階下ニ奉迎シ、官司ノ

先導ニテ、社務所ニ入り少憩、

十一時二十分、官司以下、幄舎ニ著ク、

次、勅使、社頭ニ参向シ、樓門外ニ於テ手水ノ儀アリ、

次、使以下、祓ノ幄ニ著ク、主典、祓ノ詞ヲ讀ミ、神ノ枝ヲ執テ祓フ、

次、使以下、樓門ヲ入り、幄舎ニ候ス、

次、屬、御幣櫃ニ副テ進ミ、本殿前拜ノ南方ニ置ク、

次、官司、祭儀具スル由ヲ使ニ申ス、

次、官司、昇殿御扉ヲ開キ、再拜、拍手、畢テ側ニ候ス、

此間奏樂

次、禰宜以下、神饌ヲ傳供ス、

此間奏樂

次、官司、祝詞ヲ奏ス、再拜、拍手、畢テ本所ニ復ス、

祝詞

掛卷母恐支稻荷神社乃大前爾官司正六位大貫眞浦恐美恐母美白左今度露國爾對氏戰乎開久事乎告奉志留止京都府知事從三位勳二等大森鍾一乎差使氏齋祭世給賀布故爾大前乎慎敬比御酒波麩上高知麩腹滿並氏鱸乃廣物鱸乃狹物與津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至留萬置足氏波志仕奉米更志給布事乎聞食止恐美恐母美白須

明治三十七年三月十七日

次屬御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ假ニ案上ニ置ク案ハ豫メ本殿階下ニ設ク

次官司御幣物ヲ執テ神前ノ案上ニ奉リ再拜畢テ本所ニ復ス

次使御祭文ヲ奏ス畢テ幄舎ニ復ス此間着床ノ官員起ツ

祭文

天皇乃大命爾坐世掛卷母恐支稻荷神社乃大前爾京都府知事從三位大森鍾一乎使止爲氏白給波久白左天津日嗣知食利志與以來萬機乃御政乎執行

此給布止外國乃交際波殊爾平和乎宗止志大坐爾今年計母更須露國爾對氏比

戰爭開久事志波奈利已倍久母事止奈思食須故此由乎告奉志留止禮代乃御幣

帛奉出給布事乎平久更氣安更氣聞食氏海路陸路爾射向布寇等乎速爾伐平

氣食國乃大御稜威乎天下爾照輝志加平和乎彌遠長爾克復米左志常磐爾堅磐

爾守幸倍給倍白給布天皇乃大命乎聞食止恐美恐母美白須

明治三十七年二月十七日

次使玉串ヲ献リ拜禮畢テ幄舎ニ復ス

次地方官員拜禮

次官司玉串ヲ献リ拜禮畢テ本所ニ復ス

次禰宜以下拜禮

次禰宜以下御幣物及神饌ヲ撤ス

此間奏樂

次官司御扉ヲ閉ツ再拜畢テ下殿幄舎ニ復ス

此間奏樂

次各退出、

次使以下、社務所ニ於テ直會、

午後二時三十分、使以下歸廳、

二月十九日、祈年祭奉幣、京都府參事官藤本充安參向、

十一月三十日、新嘗祭奉幣、京都府參事官藤本充安參向、

三十八年二月十八日、祈年祭奉幣、京都府書記官中山巳代三參向、

十一月廿七日、新嘗祭奉幣、京都府事務官藤本充安參向、

十二月十一日、露西亞國ト平和克復奉告勅使トシテ、京都府知事大森鍾一

參向奉幣、其式左ノ如シ、

式次第

早旦、官司、神殿ヲ裝飾ス、

午前十一時、官司以下、幄舎ニ着ク、

次勅使以下、社頭ニ參向シ、樓門外ニ於テ手水ノ儀アリ、

次勅使以下、祓ノ幄ニ着ク、主典、祓ノ詞ヲ讀ミ、神ノ枝ヲ執テ祓フ、

次勅使以下、樓門ニ入り、幄舎ニ候ス、

次屬御幣櫃ニ副テ進ミ、本殿階下ノ南側ニ置ク、

次官司、祭儀具スル由ヲ勅使ニ申ス、

次官司、昇殿御扉ヲ開キ、再拜手畢テ側ニ候ス、

此間奏樂

次彌宜以下、神饌ヲ傳供ス、

此間奏樂

次官司、祝詞ヲ奏ス、再拜手畢テ本所ニ復ス、

祝詞

掛卷 母恐 伎稻荷神社 乃大前 爾官司正六位大貫眞浦恐 美恐 母笑 白左 鬘爾 露
國止戰 乎開 賀伎 志今回事平 爾良 加定 乎禮 留以互其由 乎告奉 志留止京都府知事從

三位大森鍾一乎差使豆齋祭良給布故爾大前乎慎敬比御酒波甕上高知甕
腹滿並豆鱸乃廣物鱸乃狹物與津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至留萬置足波
豆仕奉良志給布事乎聞食止恐美恐母美白須

明治三十八年十二月十一日

次屬御幣物ヲ辛櫃ヨリ出シ假ニ案上ニ置ク、

次官司御幣物ヲ執テ神前ノ案上ニ奉リ、再拜畢テ本所ニ復ス、

次勅使御祭文ヲ奏ス、此間着床ノ官員起ッ畢テ幄舎ニ復ス、

御祭文

天皇乃大命爾坐世掛卷母恐伎稻荷神社乃大前爾京都府知事從三位勳二
等大森鍾一乎使止爲豆白給波久白左爾露國止戰乎開仗志軍人諸波身
母多奈志良受勇美戰比勤美勉豆海爾陸爾射向布敵等乎悉爾事向服從波
米又仕奉留官人乎始米公民諸爾至留萬國內舉豆戮力一心爾志明仗淨仗
誠心以豆仕奉爾留依利皇御國乃大御稜威乎天下爾照輝加志米豆事平爾良加定

萬利斯久速久事平爾良加定留波專皇神等乃廣久高仗恩賴止奈最母恐美尊
美思保食須故此由乎告奉留止禮代乃御幣帛奉出給布事乎平良氣安良氣
聞食豆大朝廷乃内乎始豆仕奉留百官人等天下四方國乃公民爾至留萬彌
榮爾榮志給止白給布天皇乃大命乎聞食止恐美恐母美白須
明治三十八年十二月十一日
次勅使玉串ヲ献リ拜禮畢テ幄舎ニ復ス、
次地方官員拜禮
次官司玉串ヲ献リ拜禮畢テ本所ニ復ス、
次彌宜以下拜禮
次彌宜以下御幣物及神饌ヲ撤ス、
此間奏樂
次官司御扉ヲ閉ッ、再拜畢テ下殿幄舎ニ復ス、
此間奏樂

次各退出

三十九年二月廿三日、祈年祭奉幣、京都府事務官田中勝之丞參向、十一月廿八日、新嘗祭奉幣、京都府事務官田中勝之丞參向、

○台記

臣下奉幣

仁平元年四月九日丁卯、奉幣、稻荷、依祭也、年來不奉、而以入內、事成就故、每歲可奉也、

久壽元年四月九日辛卯、今日、稻荷祭、依穢、延引、余不信其穢、仍奉白妙幣、神馬乘尻於彼社、先例、執政、無稻荷神馬、皇后宮入內、立后、事祈請、此神得成就、因之、欲每年奉神馬等、仁平元年以後、祭日有障、于今不奉、神馬乘尻、妙幣、今年始奉也、○中、午刻臨東河、二條、末依初、度、臨河也、奉幣、陪膳、文章博士茂明朝臣、陰陽師、雅樂頭、泰親、使散位重範、藏人、五位、高陽院判官、代、乘尻用平文移、依祭、延引、彼神御旅所、使等可參旅所、歎成疑之間、飛驒前司重忠申曰、松尾祭日、神御旅所、然而辨參本社、准此故、知可參本社矣、所申有理、召使仰其由、未出之、使乘尻不登山上、於下社、廻馬畢、分

散、但、小使、下家司登山上、奉幣、二社、其幣三串、取所儲、五串、於河原、奉幣訖、歸亭云云、

○百練抄十四

延應元年七月十日丁亥、禪定太閤、奉幣、五社、石賀、稻、春日、被祈、申、東福寺上棟、事、來日、

○實躬卿記

弘安十年丁亥十月八日、晴、午刻於稻荷社、奉幣、自此社乘車、侍二人上、結帶、劔、八葉車、懸下簾、小雜色、少々召具也、

附 奉納物

○三代實錄十八

貞觀十二年（清和天皇）十一月十七日乙丑、是日分遣使者、諸社、奉鑄錢司、及葛野鑄錢所、新鑄錢、稻荷使、神祇大佑正六位上、大中臣朝臣常道、

○三代實錄三十三

元慶二年（陽成天皇）三月九日乙巳、是日分遣使、奉幣馬於、中、稻荷、賽舊禱也、

○日本紀略七

天元五年(天皇)七月廿三日壬子奉遣走馬音樂於稻荷社

○日本紀略十一

寬弘七年(天皇)閏二月九日己未於八省院奉幣廿一社依祈年穀也又被申明年當三合厄前後年有閏月可有御慎之由神祇官陰陽寮所申也仍伊石賀松平稻略○中十二社別被副進神寶東遊

○殿曆十一

天仁二年(鳥羽)十月廿三日甲午天晴略○中今日稻荷遷宮雖然依先例非神公家又同今朝從內召馬獻之

同年十月廿九日庚子天陰雨時々下寅時許女房令參賀茂辰時許著直衣參內令催大神寶午時許御覽神寶其儀於晝御座有此事依所狹令撤晝御座事如常御覽神寶次第直上先伊勢略○中次京內五社松尾小一平野小三稻荷小三大原野小二園韓神小二

○兵範記

仁安二年(六條)十一月一日乙丑大神寶使進發日時定略○中奉諸社神寶使略○中

稻荷左馬頭藤原朝臣親信 十一日乙亥大神寶使進發稻荷小三

嘉應元年(高倉)十月十日壬辰此間權大納言公保修理大夫成賴卿被候仗座藏

人治部少輔兼光仰納言云一代一度大神寶奉遣日時令勘申略○中陰陽寮擇申

可被奉遣一代一度大神寶使於七道諸國日時今月廿六日戊申時午點若未○

略奉諸社神寶使官中并京邊略○中稻荷能登守平朝臣通盛 廿六日戊申下官

參內依大神寶使進發也稻荷小三

○吉記

治承五年五月二日丁丑傳聞自院(後白河院)被奉獻銀劍唐錦等於諸社以廳官爲御使云云略○中稻荷略○中以上社別御劍一腰唐錦一帖御幣紙二帖白布一段

○目代荷田延重日記

寬文七年(後西院)十二月廿一日新院御所より御簾十五間拜領

一當社御前横は、下之社七尺貳寸、中社上社、田中社、四大神、四社御前は、六尺貳寸、也、
一上、白狐社御前横は、六尺五寸、
一若宮社御前横は、五尺貳寸、

○幸充日次記

寛永五年(後水尾天皇)八月廿二日庚戌、午刻、禁中車寄迄、伺公之處、神宮へ銀子五拾枚參テ、御願成就候様、祈念可仕由被仰出、尤内々、儀不及次第解、祭主直々可申由也、此時、白川宰相、松尾、稻荷、大原野三所へ、下知被仰出、三所へ銀子三拾枚、拜領云云、

○稻荷神社古文書目録

後水尾天皇勅筆短冊

君かあたり見つゝ□ほらん伊駒山くもなかくしそ雨はふるとも

稻荷社月次御法樂和歌上下二卷

御製(靈元法皇)

稻荷詣

稻荷山杉のかさしも二月のさらじをりえて今日やみゆらん

元祿十年十月廿八日

早春

いつる日のめくる方なる稻荷山先春見えて雪もけぬらん

元祿十五年六月十七日

初春水

木かくれも春そくまなき稻荷山やまの下水水なかれて

元祿十六年正月廿三日

霞始聳

やわらくる光なからの春の色に今朝よりみつの峰を霞める

元祿十八年正月十七日

早春風

いなり山雪を残りぬ風の色の青葉の杉も春や見すらん

寶永二年正月廿三日

山霞

千世こめてさらに霞の色まされことしたむけもみつの山端

寶永二年五月七日

○御殿預荷田信名日記

享保二年十二月廿三日、今日伯殿へ中神主目代被參、法皇御所ヨリ之御奉納物請取ニ伺公也、御奉納物者御弓箭五通也、尤弦ヲ被掛、矢二本宛相添也、袋ニ被入、箱ニ入也、御法樂之御和歌之卷物二卷相添、(前項)尤箱ニ入也、直ニ神庫ニ入置也、

○稻荷社事實考證記

一當社 稻荷宮(書)勅額、嵯峨天皇御宸翰之旨ヲ傳へ、亦一説ニハ、村上天皇御

一神面之事

宸翰トモ傳フ、何レ勅筆無相違之旨、代々傳來也略下

謂、神面者、稻荷神社三座、第二社、曰之中社、所齋神、天孫瓊瓊杵尊御鎮座也、神面乃、以其因緣、搥土老翁之神面、御奉納之由、但時代未詳也、或云、中世以來之事歟、今掛神輿者、近來寫用、代々所傳、如件、

△稻荷神社寶物目錄

一神面

一面

○奉稱、搥土老翁神、

寸法 高サ 九寸八步 幅 七寸五步

時代并傳來所由未詳、

○稻荷神社寶物目錄

一古歌懷紙

後桃園天皇勅筆

むかしたれかよる櫻の花をうへてよしのをはるの山となしけむ

一御産衣

光格天皇御物

一三馬野遊之御書

仁孝天皇勅筆

○白川家御日記

松尾稻荷等社江、今度立米五十石宛、御奉納被仰出(孝明天皇)付右社司早速召狀差出候處、唯今入來、申達候處、各謹御請、申旨仍御届申入候也、

文久二年九月廿五日

野宮宰相中將殿

祈雨

祈請附神異

△延喜式三

祈雨神祭八十五座並大

稻荷社三座

座別絹五尺、五色薄繩各一尺、絲一絢、綿一屯、木綿二兩、麻五兩、鬘薦半枚、每社調布二端紙、夫一人、丹生川上社、貴布禰社、各加黑毛馬一疋、自餘社、加庸布一段、其霖雨不止、祭祈亦同、但馬用白毛、

△本朝神社考

祈雨神

稻荷神社三座

○本朝世紀

天慶元年(朱雀天皇)七月三日戊申、今日於諸寺諸社被下奉讀、仁王般若經一萬部、宣旨、是依地震未休也、

稻荷社使、貞譽、可、率、九口、

右坤元乖例震動未休求之舊記訊之卜筮絳闕之下變異難量丹墀之間咎徵可慎夫以仁王般若者護國之防禦濟世之神符也紫微宮中青瑣門外縱有妖孽宜消纖液於朝旭之前縱有禍胎須拂遊氛於曉嵐之後中納言藤原朝臣實賴宣奉詔宜仰綱所令件寺社殊請堅固修練智行兼備者今月八日自已二點專竭精誠轉讀件經者綱所承知依宣行之仍須熟仰寺社身心不退令僧一口讀經五部義也依彼仁王之妙力將增聖德之遐算事緣繪旨不得疎略

五年五月七日庚寅衙後大納言藤原實賴卿中納言藤原顯忠卿同元方卿權中納言同敦忠卿參議源高明朝臣伴保平宿禰源庶明朝臣藤原在衡朝臣參入著宜陽殿西廂座被定行爲祈雨於諸社可有御讀經事○中稻荷○中以上各可率十口僧侶別口供料白米一斗菜料黑米一斗以各當國正稅可給之由辨官下宣旨

○類聚符宣抄三

疾疫事

左辨官下綱所

應分頭詣寺社轉讀仁王般若經事○中

稻荷 權少僧都 僧十口○中

右廼者疾疫多發死傷遍聞雖修般若之齋會未有病惱之消除右大臣宣奉勅宜仰綱所命件僧等各率淨行僧十口詣彼寺社始從今月廿四日辰二點三箇日間專竭精誠轉讀件經除愈黎元之病痾兼祈年穀之豐稔其料物○中稻荷社料請山城國○中綱所承知依宣行之事在攘災不得疎略

天德二年(村皇)五月十七日 左大史竹田宿禰

右大辨源朝臣

○

疾疫事

左辨官下綱所

應分頭詣諸社講演仁王般若經事○中

稻荷 桓舜 僧六口○中

右去冬以來疾疫滋起天亡之者多有其聞仍種種祈禱一一勤修三寶之冥助難及一天之病患未降矣夫仁王般若者護國之城塹斷禍之刀劍也非仰五力之本誓何得救萬姓之危命哉權中納言能信宣奉勅宜仰綱所令件僧等各率淨行僧六口親詣社頭始自今月廿六日午二點三箇日間專勵精誠講演件經者綱所承知依宜行之事是攘災不得疎漏但其供菜料○中稻荷○中等社近江國○中早可運送之狀下知件等國國已了

治安元年（後一條天皇）四月廿日

右大史津守

少辨藤原朝臣義忠

○

疾疫事

諸社御讀經

稻荷 真範 僧六口

長元三年三月廿三日

右中辨藤原朝臣賴任傳宣右大臣實宣奉勅廼者疾疫既發須求攘除農業漸催將期豐稔轉災禍者無先佛法生福祚亦在神明仍先消痾恙於一天欲充稼穡於萬邦故占靈社之砌敬講護國之教冥助之不疑感應豈其虛哉宜仰綱所令件僧等各率淨行僧六口親詣諸社始從來四月六日午尅三箇日間講演件經綱所宜承知依宜行之事是攘災不得疎漏但其供菜料○中稻荷○中近江國○中早可運送之狀下知件國國已了者

長元三年三月廿三日

左大史惟宗朝臣義質奉

○小右記

長元四年八月七日壬午從今日五ヶ日於諸社被行御讀經先年御願云云○中
稻荷大僧都尋光

○本朝世紀

承德三年(堀河天皇)四月廿八日庚子○中被定申諸社諸寺如說仁王會日時日辛亥依世間不靜御祈也諸社石清水賀茂上下松尾平野祇園日吉稻荷○中畧但諸社僧綱各一口奉件僧三箇日可勤之

○殿曆九下

嘉承二年七月七日辛卯寅刻俄有軒廊御占叡慮有所思食吉凶可卜申之由以爲隆被仰下上卿權中納言宗忠御卜形奏聞留御所諸社御讀經日時僧名定石清水賀茂上下稻荷祇園吉田等也

○兵範記

仁安四年(六條天皇)二月十日丁酉參院奏日來所積之雜事條條奉御定之次仰云大神宮橫川中堂等炎上猶驚思食此外神社佛寺靈驗所等不可鎮其災諸社御願寺等併可願仰者即經大略目錄進覽之即進給依仰各下知神社以下可成宣旨之由仰藤中納言

仁安四年二月十日宣旨

社寺炎上猶驚思食石清水賀茂下上松尾平野稻荷○中各鎮其災致祈請宜令社司堂衆守護

○玉葉十九

安元二年(高倉天皇)正月十一日丁巳天晴此日女叙位也余始奉仕執筆修諷誦於十箇寺八幡賀茂稻荷春日大原野吉田下畧

○玉葉廿五

治承元年十二月十七日壬午陰晴不定此日太上法皇蓮華王院內立五重之塔婆設一日之齋會○中一當日御誦經

賀茂春日稻荷祇園吉田○下

○玉葉廿六

治承二年正月五日庚子天晴此日叙位儀也余始執筆早旦修諷誦於十箇寺八幡賀茂上下稻荷春日吉田○下畧

○山槐記

治承二年五月廿八日辛卯中宮德子御年廿四六波羅入道前太政大臣尼御懷妊當五箇月仍有御着帶事初度也中自今日被行御祈等中稻荷誦經御同年十月廿九日己未中於二社有御祈

稻荷

百座仁王講以本社僧十

行事宮内少輔棟範

○玉葉廿九

治承三年正月十七日丙子天晴此日除目初日也余奉仕執筆早且修諷誦於十箇寺八幡賀茂上下稻荷春日大原野吉田

○玉葉三十

治承三年三月十二日庚午晴中今日平野行幸御祈御讀經定云云八幡賀茂春日大原野吉田

○仁和寺日次御記

建保四年順德天皇三月十四日丁卯入道前内大臣薨上皇七條院稻等御參籠依此事共還御

○百練抄

建保六年四月廿六日上皇門御並女院御參籠稻荷社可爲七箇日云云

○經後卿記

寶治元年後深草天皇十一月廿一日今日姬宮御五十日無風雨之難可被遂行之由可祈禱之由仰遣諸社

八幡 賀茂下上

松尾 平野

稻荷庵奉書 春日

大原野 日吉

祇園

○勘仲記

弘安十年(後字多天皇)五月廿八日戊午、自今日祭主參籠本官方角神社實檢事、今日所宣下也、上卿土御門中納言書口宣下之、官使檢非違使、共以兩樣之由、殿下有仰、

弘安十年五月廿八日 宣旨

旬月以來霖雨未晴、訪之占推、良巽方神依穢氣不淨、成其崇云云、鴨、稻荷、日吉等社、宜差遣官使、且令注進、神事違例、穢氣不淨、且實檢言上、彼社等四重內者、

藏人治部少輔藤原兼仲奉

○管見記

正和四年(花園天皇)四月廿一日戊戌、前左大辨宰相狀如此、

此間乍存、不言上候、何御事候、本御座次第日次如此候、諸社已下御祈事、以日被仰之、注文進上之、每日御被陪膳役送、陰陽師等進發狀如此、哉、陪膳大略、每日及關如候、仍藤房令相催、諸方之頭辨、此間連々令參勤候、陰陽師再三被相

催候、五人之外、無領狀之輩候、仍先以五人被供番々承曆、元永五人、大治以後大略八人參入候、每年可參入言上候、以此旨、可令洩予給、宣房恐惶謹言、

四月廿一日

宣房

御祈

伊勢

八幡

賀茂上下

松尾

平野

稻荷親世氏

春日

大原野

住吉

日吉

梅宮

吉田

祇園

北野

○下略

○續史愚抄

正和五年七月十五日乙卯被宣下曰近日疫病流布因自明日日十六七箇日可令轉讀仁王經於石清水賀茂下上松尾平野稻荷北野等社砂五給

○薩戒記一

應永三十年(後小松天皇)十二月卅日丁丑○中稻荷般若會

○建內記

永享十一年(後花園天皇)二月廿八日丙午夜陰彗星出現事司天從三位安注進室町倍有重卿

殿仍公家武家御祈事早可有其沙汰之由被仰中山宰相中將定親室町殿御祈事諸寺諸社護持僧十人祈念事爲中山奉行相觸之明後日卅日天地災變御祭有重卿可勤行由被仰候○中諸社御祈○中稻荷

○親長卿記

文明八年(後土御門天皇)十二月廿四日火災事一社一同別抽懇祈可致天下泰平國家安全之精誠之由可被下知松尾稻荷廣瀨龍田社給之由被仰下候也恐惶謹言
十二月廿四日
元長

伯二位殿

○資益王記

明應五年五月廿六日稻荷社三合御祈禱卷數到來則令進入了(又見于忠實王記)

○忠實王記

明應九年正月八日怪異御祈事右少辨尙顯以一通觸之怪異御祈事從來十六日一七箇日殊可抽精誠之由可令下知松尾稻荷廣田等社給之旨天氣所候也仍上啓如件

二月七日

右少辨尙顯

謹謹上伯二位殿

御祈事自來十六日一七箇日可抽精誠懇祈之由御教書案文遣之早相觸一社可被致懇祈之旨本官所候也仍執達如件

二月七日

左衛門尉孝久奉

稻荷社神主殿

同年五月十六日、炎旱并病氣諸寺諸社御祈事被仰出候間、則御祈奉行職事尙顯ニ申遣之、

祈雨并病事御祈事、自來十八日一七箇日、殊可抽精誠之由、可令下知松尾稻荷廣田等社給之旨、天氣所候也、仍上啓如件、

五月十六日

右少辨尙顯

謹謹上伯二位殿

祈雨并病事御祈事、一七箇日、可抽精誠之由、御教書如此、早相觸一社、可被致懇祈之旨、本官所候也、仍執達如件、

五月十六日

左衛門尉孝久奉

稻荷社神主殿

文龜元年(後柏原天皇)七月廿六日、依炎旱雨御祈事、廿七日雨御祈事、則昨日任給旨、下知廣田松尾稻荷等社、仍請文見遣奉行職事畢、
同年八月二日、傳奏御飛書在之、

變異事、爲公武御祈、自來七日一七箇日、特可抽精誠之旨、可令下知松尾稻荷廣田等社給候也、恐恐謹言、

八月二日

政顯

伯二位殿

變異御祈事、傳奏御教書如此、仍案文遣之、早相觸一社、可被抽精誠懇祈之旨、本官所候也、仍執達如件、

八月二日

左衛門尉孝久奉

稻荷社神主殿

○續史愚抄

弘治二年(後奈良天皇)三月七日、被仰慧星御祈於略○中稻荷等奉行藏人、權右中辨經

元○案文

元龜三年(正親町天皇)二月八日甲子、仰天變地妖御祈、撰良辰七箇日、可勤行由、於諸社神宮賀茂上下松尾寺、稻荷廣田吉田等、略○中奉行藏人、左少辨輝資、卿符案、御湯殿記、輝資

○山口幸充日次記

寛永三年(後水尾天皇)五月十八日己丑晴入夜中院黃門ヨリ炎旱ニ付諸社諸寺祈雨之事存知可申書付可令參申來天變地妖之時御祈之所々書付進申候神宮松尾稻荷廣田吉田○中略賀茂下上此等也

○上社禰宜秦公杓日記

寛永八年八月中宮ヨリ御祈被仰出社中一七日參籠家記抄出

同年十月五日院御所ヨリ御初穗拜領社中一七日參籠家記抄出

十年八月廿日國母様御懷妊御祈家記抄出

同年十月廿七日國母様ヨリ被仰付二夜三日御祈禱

十三年親王御不例御祈家記抄出

十八年仙洞御不例ニ付御祈家記抄出

○續史愚抄

寛永二十年十月廿日辛巳有即位習禮今明兩日有即位無風雨難無爲御祈七

社石清水賀茂下上松尾九寺○中奉行藏人右少辨嗣長卿資

○上社禰宜秦公杓日記

寛文四年(後西院天皇)二月廿七日法皇御祈家記抄出

五年正月廿日當年中禁中御祈例月被仰付家記抄出

△稻荷社古今事實考證

月次御祈濫觴

寛文五年正月廿日禁中より月次御祈被仰付廿一日御祈初也

○上社禰宜秦公杓日記

寛文五年九月廿二日法皇ヨリ八條式部卿宮御違例御祈家記抄出

十三年三月廿五日一七箇日御祈去廿一日於小御所有奇異所爲狐狸云云家記抄出

出抄

○方長卿記

延寶八年(靈元天皇)八月六日入夜法皇御不例○中則御祈之事被仰出七社七箇寺

也○中稻荷

○上社彌宜秦公杓日記

貞享四年六月廿一日、一七箇日御祈被仰出家記抄出

元祿三年(東山天皇)六月七日、從明日一七箇日御祈被仰出家記抄出

○基量卿記

元祿九年九月七日、晴、本院御不豫以外之由也、於上七社七ヶ日御祈、一社一同可抽精誠、由院宣、庭田中納言仰之重條○中稻荷、松尾等、伯三位奉之、

○御殿預荷田信友日記

元祿十七年二月八日、舊冬被仰付候御祈禱御教書如左、

元祿十六年癸未十一月、關東大地震、付、稻荷一社中、御祈禱被仰付候事、

△臨時御祈禱七箇日社中一同大神事執行用脚目錄

- 一 神殿被所裝飾之事
- 一 大祓器具之事

一大饗神供之事

一 神樂所鈴器之事

一 直會殿饗羞之事

右五箇條之料大槩八十石餘以上

元祿十六未年十二月

稻荷御殿預 羽倉主膳 信友

稻荷上神主 松本主水 爲親

稻荷中神主 松本筑後 爲量

稻荷社務 橋本將監 公建

一 七箇日御祈禱之次第

一 前日齋戒

一 早旦正官五人、彌宜、祝、權職等、神人等不殘、參集祈禱所拜殿、

次社司中、次第二昇殿、各着座、

次正官開內陣之御戸

次獻神供

次祝詞

次奏神樂

次社司中次第ニ退下、祈禱所拜殿ニ着座

次社司中取祓串一老乃神人役之

次祓執行千座

次祝詞

次社司中次第ニ昇殿

次內陣ニ納太麻

次社司中次第ニ退下

次社司中於神供所齋籠

一未刻社司中從齋籠屋祈禱所拜殿ニ着座

次祓執行千座

次社司中次第ニ昇殿各着座

次祝詞

次奏神樂

次撤神供

次社司中齋籠屋江退下

未十二月四日

稻荷社中

覺

寛永七年三月、台徳院様御祈禱被爲仰付、御祓献上、御祈禱料百石、御奉納之、同八年八月、御祈禱被爲仰付、御祓献上、御祈禱料百石、御奉納之以上

元祿十六未年十二月

稻荷御殿預 羽倉主膳 信友

稻荷上神主 松本主水 爲親

稻荷中神主 松本筑後 爲量
稻荷社務 橋本將監公建

白川三位様

御雜掌中

○續史愚抄

寶永五年三月十八日乙未、依火災事被仰付御祈於七社伊勢、石清水、賀茂、下上、松尾、平野、稻荷、春日、七寺○中奉行藏人左少辨治房輝光卿記

○御湯殿の上の日記

享保五年庚子(中御門)正月十七日、くもる女御の御かた(藤原)御心はろく候○中 付○中 いなりへ御きたう仰付られ候、

○御殿預荷田信名日記

享保十三年五月廿三日、今日伯家より下神主へ被下候書付、
來月十一日、可被行立太子節會、無風雨、難可被遂、無爲之節、御祈事、從來廿七

日一七箇日間、一社一同可抽精誠之旨、御教書案交如此、早相觸一社、可懇祈之由、本官所候也、仍執達如件、

五月廿三日

伯家雜掌

左衛門尉忠久奉

稻荷社神主殿

十七年閏五月廿七日、今度伯家より被出候御下文寫、

○就法皇御不例御祈事、自來月二日一七日間、一社一同別而可抽精誠之由、御教書如此、候、早觸一社、可致懇祈之由、本官所候也、仍執達如件、

閏五月廿七日

伯家雜掌

左衛門尉忠久奉

稻荷社神主殿

○兼胤公記

享保十八年正月十三日乙未、參内○中帥中納言被仰傳云、來月二日、可有東宮

御元服、日時無風雨之難、可被遂行、無事無故之由、自來廿二日一七ヶ日、於七社七寺、可祈請之由、可沙汰之旨也、畏唯爲急速、以內々消息觸之、○中稻荷、仰傳奏伯中將、

○資方卿記

享保十八年正月廿二日、陰晴、申刻參内、東宮御元服習禮也、○中自今日至廿八日、於上七社、伊勢、石清水、賀茂、下上、松尾、平野、稻荷、春日、御元服御祈禱有之、

○御殿預荷田信名日記

享保二十年三月十八日、今日より御讓位御受禪之御祈禱始る也云云、
十月十一日、伯家御教書如左、

來月三日、被行御即位無風雨、難可被遂、無爲之節、御祈事、從來十九日一七箇日、一社一同可抽精誠、旨御教書如此、早相觸一社、可致懇祈之由、本官所候也、仍執達如件、

享保二十年十月十一日

伯家雜掌

左衛門尉忠久奉

稻荷社神主殿

延享四年(桃園天皇)三月六日、伯家御教書之旨趣如左、

來十五日、親王御元服、同十六日立坊、付、從來十日到十六日、一七箇日之間、御祈被仰付候、一社一同可遂勤行云云、

同年四月十九日、來月就御讓位、從來廿三日、到廿九日、一七箇日之間、御祈禱、一社一同可致勤行、旨從伯殿被仰渡候也、

同年五月十八日立后、付、廿二日より廿八日迄、一七箇日之間、御祈禱被仰渡候也、

寬延三年六月廿一日、今日伯殿へ參上之處、御狀被渡、明廿二日より一七箇日之間、天下安全之御祈禱、一社一同可抽精誠、旨攝政殿御命之趣、伯殿へ被仰渡候、由御教書、追而被出云云、

○愚紳光房卿誌

寶曆十三年(後櫻町)十月六日、參内之序、葉室大納言資枝朝臣等、内々被傳攝政殿仰云、來十一月廿七日御即位之日、無風雨難等、可被遂行事、自來十四日一七日御祈事、可下知七社旨也、即以消息示、送源大納言許、消息如此、

來十一月廿七日、可有御即位之日時、無風雨、難可被遂行、無爲之節、由御祈事、自來十四日一七箇日、一社一同可抽精誠之旨、可令下知神宮給者、依攝政殿御消息言上如件、

十月六日

左少辨光房奉

進上 源大納言殿

小時、有返報、早可令下知云云、則下知知音宿禰許了、自餘文言等略之、賀茂下上石清水社松尾稻荷等社、付伯三位資顯王、兩社傳奏也、

○賴言卿記

寶曆十三年十月十四日丁酉、就御即位、自今日到來廿日一七箇日、於七社伊勢水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、被修御祈了、(又見手續史、愚抄)

○御殿預荷田信名日記

明和二年八月廿四日、此度上七社御祈被仰出、今日より一七箇日間執行、五年正月廿九日、此度立太子節會、來月十九日御治定、付二月八日より十四日迄、御祈禱被仰付候、

右伯家御下知二候、

七年六月廿五日、今日伯殿より臨時御祈之旨被仰渡、御教書は明日可相渡由、而、上啓之寫如左、

消息上啓之寫

天下安全、寶祚長久、東宮延命御祈、從來廿八日至來月五日一七箇日、一社一同可抽精誠之旨、可令下知松尾稻荷等社、給之旨、攝政殿御消息之所候、仍先内々申入候也、恐惶謹言、

後六月廿四日

光 祖

伯三位殿

同年十月廿八日、今朝從伯家御用召ニ付參上候處、伯殿御對面、來月廿四日、御讓位ニ付、一社一同御祈被仰付來月十八日より廿四日迄、勤行可仕旨被仰渡候也、

八年三月十五日夕方、伯家より御用召ニ付參上候處、伯殿御對面、來四月廿八日就御即位、當廿四日より四月朔日迄七箇日、御祈被仰出候旨被仰渡候、

○愚紳紀光卿誌

明和八年三月廿四日、自今日一七箇日、於七社、伊勢、石清水、賀茂、下上、松尾、平野、稻荷、春日、御即位日、時、無風雨、難可被遂行、無爲之節、御祈、兼而被仰下所及修行也、奉行光祖、

○御殿預荷田信名日記

明和八年四月十七日、今日伯家より御用召ニ付參上候處、來月九日就立后、來廿四日より一七箇日、御祈禱被仰付候旨被仰渡、

安永二年後桃園天皇三月廿四日、主上御不豫ニ付、今廿四日より一七箇日、御祈禱被仰出、

七年七月十五日、今日伯殿御用召ニ付參上候處、臨時御祈被仰出候由ニ而、御教書被相渡、來廿二日より七箇日執行之旨也、

天明三年光格天皇八月廿一日、伯家雜掌より、此度御祈之儀被仰出候ニ付、來廿三日より一七箇日、可勤行旨被仰渡、御祈奉行より之申文如左、

天下泰平、玉體安穩、寶祚長久、御祈、事從來廿三日一七箇日、一社一同、殊可凝懇念之旨、松尾、稻荷等、可有御下知之事、

右之書付被相渡也、

○正彌宜秦公府日記

寛政六年二月十四日、臨時御祈始ニテ、御教書如左、

准三后來月一日、令入内給、同六日、令退出于本宮、給今度被用洞裏、同七日立后、同十日、入内等之日、時、無風雨、難可被遂行、無爲之節之由、自當十四日一七箇日、一社一同、抽精誠、可令申祈、請可下知、松尾、稻荷等、社給者、依天氣、執啓如件、

二月七日

右少辨資董奉